北杜市埋蔵文化財調査報告　第33集

山　梨　県　北　杜　市

史跡谷戸城跡周辺遺跡

史跡谷戸城跡範囲確認調査報告書

2009
北杜市教育委員会

北杜市埋蔵文化財調査報告　第33集

山梨県北杜市

しせきやとじょうあとしゅうへんいせき

史跡谷戸城跡周辺遺跡

史跡谷戸城跡範囲確認調査報告書

2009

北杜市教育委員会

例　　言

1　本書は、山梨県北杜市大泉町谷戸字城山に所在する国指定史跡谷戸城跡の範囲確認調査報告書である。

2　本確認調査は平成10年度から19年度までの10ヶ年間に実施し、平成20年度に調査成果、出土品の整理と報告書作成を行った。

3　調査は国指定史跡谷戸城跡の城域確認を目的として、国庫補助金、県費補助金の交付を受けて実施した。

4　確認調査は北杜市教育委員会が直営で実施した。調査組織は下記のとおりである。なお、平成16年10月31日までは合併前の旧大泉村教育委員会が調査主体であった。

調査主体　　北杜市教育委員会教育長　井出武男
調査担当　　北杜市教育委員会生涯学習課文化財担当　渡邊泰彦（現地調査）
同　上　　廣瀬公明・佐野隆（整理作業）
調査事務局　　北杜市教育委員会生涯学習課

5　確認調査の学術的な水準を確保するために、史跡谷戸城跡環境整備事業のための組織した史跡谷戸城跡調査保存整備委員会専門委員の指導助言を受けた。専門委員は下記のとおりである。

委　員　　谷口一夫（山梨県文化財保護審議会委員）
委　員　　萩原三雄（山梨県文化財保護審議会委員）
委　員　　十菱駿武（山梨県文化財保護審議会委員）
委　員　　田畑貞寿（千葉大学名誉教授）
委　員　　秋山　敬（山梨郷土研究会）

6　本書の編集は佐野が行った。第１章から３章までは佐野が執筆し、第４章は廣瀬が執筆した。

7　グリッド測量は（株）サンクス、航空写真測量は（株）テクノプラニングにそれぞれ委託した。

8　本遺跡の出土品及び調査に係わる諸記録は、北杜市埋蔵文化財センターが保管している。

9　確認調査の実施にあたって以下の地権者と方々、諸機関にご理解とご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記して感謝したい（五十音順・敬称略）。

史跡谷戸城跡調査保存整備委員会、北杜市大泉町谷戸組、同城南地区、同町屋地区、文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館、秋山　敬、出月洋文、小野正文、小林健二、小宮山智美、小宮山福三、小宮山藤雄、十菱駿武、高野玄明、谷口一夫、田畑貞寿、新津健、野代幸和、萩原三雄、保坂康夫、細田甲一、細田秋哉、藤森百合香、宮里　学、本中眞、森原明廣、谷戸孝、八巻與志夫、吉岡弘樹

10　調査参加者（五十音順）

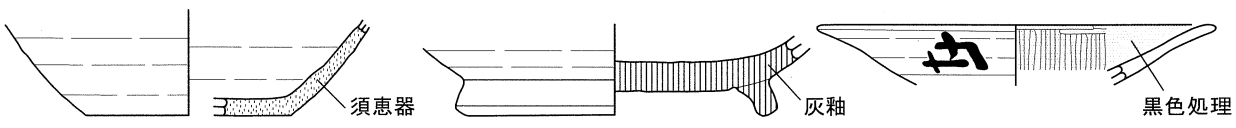
相吉よしゑ、浅川達子、浅川久代、浅川日出子、浅川房子、浅川満江、浅川洋子、大橋晴子、
風間まゆみ、斉藤乙女子、進藤キクエ、進藤たかね、千野登世、筒井菜津子、津布久功二、遠山陽一、畠山己幸、藤原祖乃子、藤森里美、藤森八千代、細田絹代、三井明美、三井種子、三井はな江、三井光恵、森脇つや子、山田雅子、若狭長

凡　　例

1　報告書中の地図は、国土地理院発行５万分の１地形図「八ヶ岳」「韮崎」を使用した。

2　図版及び観察表中の遺構埋土色及び土器胎土色は、『新版標準土色帖』財団法人日本色彩研究所に拠った。

3　本書遺物実測図中の細掛けの意味するところは以下のとおりである。



目　次

例　言
凡　例

目　次
第１章　調査の目的と経過
第１節　調査の目的 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　調査の方法 …… 2
第２章　遺跡周辺の環境
第１節　地理環境 …… 3
第２節　歴史環境 …… 3
第３章　各年度の調査結果
第１節　平成10年度 …… 5
第２節　平成11年度 …… 5
第３節　平成12年度 …… 5
第４節　平成13年度 …… 6
第５節　平成14年度 …… 6
第６節　平成15年度 …… 6
第７節　平成17年度 …… 7
第８節　平成18年度 …… 7
第９節　平成19年度 …… 7
第４章　確認調査の総括
第１節　谷戸城跡内の導線と城域の推定 …… 26

図版目次

第１図　史跡谷戸城跡と周辺の中世遺跡 …… 9
第２図　史跡整備に伴う調査地点と確認調査地点 …… 10
第３図　グリッド配置図・調査地点図 …… 11
第４図　平成10年度確認調査トレンチ・出土遺物 …… 12
第５図　平成10年度セクション図 …… 13
第６図　平成10年度セクション図 …… 14
第７図　平成11年度確認調査トレンチ・出土遺物 …… 15
第８図　平成12年度確認調査トレンチ …… 16
第９図　平成12年度セクション図・地下式土坑・出土遺物 …… 17
第10図　平成12年度出土遺物 …… 18
第11図　平成13年度確認調査トレンチ・セクション図 …… 19
第12図　平成14年度確認調査トレンチ・セクション図 …… 20
第13図　平成14年度確認調査トレンチ・セクション図・出土遺物 …… 21
第14図　平成15年度確認調査トレンチ …… 22
第15図　平成17年度確認調査トレンチ・セクション図・出土遺物 …… 23
第16図　平成18年度確認調査トレンチ・セクション図・出土遺物 …… 24
第17図　平成19年度確認調査トレンチ・セクション図・出土遺物 …… 25
第18図　既指定範囲・旧小字と旧公道・居館の範囲と遺構の分布・遺構の分布と旧公道の位置… 27
第19図　推定導線・城域推定範囲・城域と防衛線 …… 28

写真図版目次

写真図版１　谷戸城全景・平成10年度調査地点 …… 29
写真図版２　平成10年度トレンチ …… 30
写真図版３　平成10年度トレンチ …… 31
写真図版４　平成10年度・11年度トレンチ …… 32
写真図版５　平成12年度調査地点・トレンチ …… 33
写真図版６　平成12年度トレンチ・地下式土坑 …… 34
写真図版７　平成13年度調査地点・トレンチ・平成14年度調査地点 …… 35
写真図版８　平成15年度調査地点・調査地点全景 …… 36

第１章　調査の目的と経過

第１節　調査の目的

史跡谷戸城跡は、平成５年11月29日に国史跡指定を受けた鎌倉時代初期の城跡である。谷戸城跡は、山梨県と長野県の県境にそびえる八ヶ岳が数十万年前の火山活動で山体崩壊して生じた八ヶ岳岩屑流により形成された流れ山地形を利用して築城されていて、甲斐源氏の祖、逸見清光の居城と伝えられる。地元で茶臼山あるいは城山と呼ばれる山頂には土塁、堀などの遺構が残されているが、史跡整備に伴う発掘調査等により現存する遺構は南北朝期に整備された可能性が高いとされている。

築城の詳細な時期とは別に城域の検討も必要とされるところである。旧大泉村（現北杜市）は、史跡の保存管理と史跡整備のために、史跡谷戸城跡整備基本構想、保存管理計画、保存整備計画、活用計画を平成６年度より順次、策定してきたが、ここにおいて史跡指定を受けた53,293.2㎡（第３図）に隣接する区域を遺構保護地区と定め、関連遺構を想定している。

また、谷戸城跡の周辺には、「対屋敷」「御所」「町屋」など、城館跡に関連すると目される地名が残され、谷戸城跡の南500mほどに所在する城下遺跡では11世紀代の白磁も出土している。

これらの知見から想定される関連遺構の有無、分布を調査し、谷戸城跡の城域を推定するために、平成４年度より谷戸城本体と周辺地域で地中レーダー探査を実施するとともに、平成10年度からは環境整備事業に伴う発掘調査と併行して、国宝重要文化財等保存整備費補助金、山梨県文化財保存事業費補助金の交付を受けて、谷戸城周辺遺跡確認調査を実施することとした。

第２節　調査の経過

谷戸城周辺遺跡確認調査は、平成10年度から平成20年度にかけて、中途、平成16年度を除いて10ヵ年にわたり実施した。各年度の調査地点は第３図に示すとおりである。

平成４年度から実施した地中レーダー探査により、谷戸城跡に隣接する区域においても堀跡などが想定されていた。平成10年度、17年度、18年度、19年度は、谷戸城跡の北西から北東にかけて想定された外堀の有無、規模形状を確認するために試掘調査を実施した。平成11・12年度は谷戸城南側で、城下遺跡に関連する遺跡、居館跡などの有無を確認するために試掘調査を実施した。平成13年度には土塁跡などが想定された谷戸城西側で試掘調査を実施した。また、史跡谷戸城跡のガイダンス施設建設に伴い平成15年度には谷戸城跡北西で記録保存のための発掘調査を旧大泉村単独事業として実施している。平成20年度は、平成10年度からの９ヵ年の試掘調査結果を整理し、確認調査報告書（本書）を編集・刊行することとした。

各年度の確認調査経費と負担割合は以下のとおりである。なお平成15年度はガイダンス施設に伴う記録保存の発掘調査を実施し、平成16年度は旧大泉村ほか７町村が合併して北杜市が発足し、事務が煩雑になると予想されたことから確認調査を行わなかった。

平成10年度　事業費 1,444,000円（国　722,000円、県361,000円、村361,000円）
平成11年度　事業費 1,500,000円（国　750,000円、県325,000円、村325,000円）
平成12年度　事業費 2,032,000円（国1,016,000円、県508,000円、村508,000円）
平成13年度　事業費 1,309,000円（国　654,000円、県327,000円、村328,000円）
平成14年度　事業費 2,645,000円（国1,322,000円、県661,000円、村662,000円）
平成17年度　事業費 1,426,150円（国　713,000円、県356,000円、市357,150円）
平成18年度　事業費 1,046,350円（国　523,000円、県261,000円、市262,350円）
平成19年度　事業費　873,000円（国　436,000円、県218,000円、市219,000円）
平成20年度　事業費　337,442円（国　168,000円、県　84,000円、市　85,442円）

平成20年度まで、史跡谷戸城跡は本確認調査以外に環境整備に伴う発掘調査も実施してきたことは先述したとおりである。参考までにこれらの調査に伴い刊行された調査報告書等を挙げておく。

大泉村教育委員会 1999 『史跡谷戸城跡Ⅰ－平成10年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第11集』
大泉村教育委員会 2000 『史跡谷戸城跡Ⅱ－平成11年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第13集』
大泉村教育委員会 2001 『史跡谷戸城跡Ⅲ－平成12年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第15集』
大泉村教育委員会 2002 『史跡谷戸城跡Ⅳ－平成13年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第17集』
大泉村教育委員会 2003 『史跡谷戸城跡Ⅴ－平成14年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第18集』
大泉村教育委員会 2004 『史跡谷戸城跡Ⅵ－平成15年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
大泉村埋蔵文化財調査報告第19集』
北杜市教育委員会 2005 『史跡谷戸城跡Ⅶ－平成16年度環境整備事業に伴う発掘調査概報－
北杜市埋蔵文化財調査報告第７集』
北杜市教育委員会 2005 『史跡谷戸城跡　史跡環境整備事業報告書―史跡等総合整備活用推進事業―
北杜市埋蔵文化財調査報告第15集』
北杜市教育委員会 2008 『史跡谷戸城跡　史跡環境整備事業報告書―史跡等総合整備活用推進事業―
北杜市文化財報告第２集』

第３節　調査の方法

確認調査は、史跡谷戸城跡の環境整備事業に伴う発掘調査で設定したグリッドに沿って試掘坑を発掘することを基本とした。第３図には世界測地系日本公共座標系第Ⅷ系に沿った100m四方の大グリッド、10m四方の中グリッドを示している。中グリッドは４分割して５m四方の小グリッドとした。試掘坑の名称は、第グリッド内の中グリッドに北西角から東へa,b,c・・・、南へ1,2,3・・・と番号を付している。大グリッドには名称を付す必要がないと判断した。したがってa-1と呼称する複数の中グリッドが大グリッドごとに存在することとなるが、各年度の調査地点が近接することはないため支障は生じない。中グリッドはさらに北西角から時計回りに1,2,3,4と小グリッド名を付した。ある特定の小グリッドはa-1-1などと命名されることとなる。出土品への注記はこの小グリッド名を採用している。

試掘坑は必要に応じて重機で表土を剥ぎ取った後、人力で発掘して遺構の有無等を調査した。調査では自然地形の地盤が検出される深さまで掘り下げた。発掘調査で検出された遺構もしくは自然地形は、写真測量により作図記録し、試掘坑壁面で土層断面図を作成した。必要に応じて適宜、写真を撮影した。

試掘坑内に遺構が検出され、あるいは出土品量が多いなどの場合には、平板測量により遺構形状と遺物出土位置を記録した。発掘調査後は埋め戻した。

一連の確認調査による記録、出土品は北杜市教育委員会が保管している。

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理環境（第１図）

山梨県北杜市は山梨県北西端に位置し、長野県と接している。谷戸城跡が立地する北杜市大泉町は山梨県長野県の県境にまたがる火山八ヶ岳の主峰赤岳山頂から南麓、標高760mあたりまでの範囲に広がる。県内の気候区分では少雨冷涼区に属し、夏は涼しいが冬は「八ヶ岳颪」と呼ばれる強い北風に晒される。しかし八ヶ岳南麓は南向きの緩斜面で冬でも日照時間が長いため、雪解けも早い。

八ヶ岳南麓には赤岳やその南方の権現岳、三ッ頭から放射状に流れる水系が発達している。一般に火山性の山麓では、地面に降り注いだ雨水は一度地中へ浸透して伏流水となり、山麓下方で湧水となって地表に現れる。大泉町も例外でなく、表流水に比べて伏流水・湧水の水量が豊富である。大泉町には12本の小河川が流れているが、源流はいずれも標高1,500～900mの地点に点在する湧水地に行き当たる。降雨量の少ない当地域の農業経営にとってこれらの湧水は重要であり、依存度も高い。大泉町と周辺の南麓には冷たい湧水を温め、旱魃に備えるための農業用溜池が各所につくられている。

大泉町の地形区分は標高1,300m～1,400mを境として「火山体」とその「裾野」に分けられる。前者は斜度20～30°以上、後者は20°以下に分けることができ、現在の集落の中心は標高950m以下、斜度10°以下の緩斜面に置かれている。数十万年前の八ヶ岳火山の山体崩壊を伴う大規模な火山活動で生じた「流山」地形の単独山塊上に築城された谷戸城跡からは大泉町はもちろんのこと、南には韮崎市の新府城跡、甲府盆地北西端も見渡すことができる。こうした眺望は要塞「谷戸城」の立地条件として重視されたことであろう。

第２節　歴史環境（第１図）

史跡谷戸城跡は、茶臼山あるいは城山とも呼ばれ、頂上の標高は862m、周囲との比高差は30mほどもある独立した「流山」地形を利用して築かれた城跡で、城主は甲斐源氏の祖、逸見冠者黒源太清光とも伝えられている。その構造は主郭を中心に５つの郭を北、東、西の３方向に配したもので、急斜面となっている南側には数段の帯郭を設ける。城跡を東西から挟むように東衣川、西衣川が城跡の裾を流れ、天然の堀の役割を果たしている。谷戸城跡には現在も土塁、堀跡が良好に残っている。鎌倉時代初頭に想定される築城時期からすると遺構の保存状況が良好であるため、谷戸城が後代に修築されたとも考えられている。

文献史料に目を転じると、『吾妻鏡』の治承４年９月15日条に武田信義と一条忠頼が源頼朝の使者北条時政と「逸見山」で会見したとの記事がある。この「逸見山」を谷戸城に比定する説がある。古代以来、八ヶ岳南麓は逸見郷、逸見荘と称される。現在は地名が残っていないが、谷戸城跡の西側には逸見神社があり、かつては城跡の南側にあったとされている。一方で、「逸見山」を谷戸城跡から南へ７㎞下った北杜市須玉町若神子付近に比定する説がある。若神子もまた鎌倉時代前半から都市的空間として栄えた歴史の古い宿場町である。

文化年間に編纂された『甲斐国志』は、天正10年（1582）、いわゆる「天正壬午の戦い」において後北条氏が谷戸城を修築したと推測している。この戦いでは若神子城に北条軍が、新府城に徳川軍が布陣するが、この間に両軍とも周辺の城や砦を修築して防備を固めている。

伝承の域にある谷戸城築城であるが、周辺には中世遺跡などが比較的多く分布している。

谷戸城跡は、八ヶ岳南麓の標高900m付近を北西へ走り、信州へと抜ける「逸見道」に接している。周囲には「対屋敷」、「町屋」、「御所」、「城之腰」の地名が残る。

中央自動車道長坂インターチェンジ周辺から谷戸城跡にかけての一帯は、八ヶ岳南麓の緩やかな火山性斜面のなかでも特に平坦で穏やかな地形が広がる地域である。南北２㎞、東西１㎞の広がりをもつ平坦地を地元では「大八田たんぼ」と呼び、水利と日照に恵まれた優良田とされている（小宮山1997）。「大八田（おおばった）」の地名は、「八田（はった）」すなわち「墾田（はりた）」と解釈され、中世から開拓の進んだ地域

と推測される。

北杜市小淵沢町北野天神社の応永十九年（1412）銘の鰐口には、「甲州大八幡庄山宮天神」とみえ、大八田庄（おおばったのしょう）の呼称が15世紀に通用していたことが分かる。建武四年（1337）の足利直義安堵下文には、当該地域の別称「逸見荘（へみのしょう）」内の地名として上大八田村、下大八田村がみえ、近隣の夏焼村因狩倉とともに地頭職が二階堂政頼に安堵されている。この地頭職は二階堂政頼の父行貞から文保三年（1319）に譲与されたものという。元亀二年（1571）銘の堀内下総守逆修位牌にも逸見荘大八田の地名が登場する（秋山2003）。

文献史料から窺える中世前半期の大八田庄の姿は、埋蔵文化財や史跡からもある程度裏付けることができる。昭和57年から62年にかけて県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われた小和田遺跡は、堀に囲まれた居館跡と周囲の集落跡とされ、約３千枚の銭貨が納められた古瀬戸灰釉四耳壺、硯、水滴、天目茶碗、和鏡などの13世紀から17世紀にかけての多彩な遺物が出土している。北東に隣接する小和田北遺跡も14世紀から15世紀頃の集落跡とされ、掘立柱建物跡、溝跡などが検出されている。

谷戸城の南約１㎞には縄文時代晩期の集落遺跡で知られる国史跡「金生遺跡」がある。この金生遺跡でも15世紀から17世紀の掘立柱建物跡、地下式土坑などが検出されている。遺跡の南に隣接して17世紀の在地土豪居館跡「深草館跡」がある。

こうして文献史料と史跡、考古資料から大八田庄は14世紀初頭から戦国時代に至るまで、一貫して八ヶ岳南麓の開発拠点として在地土豪層の居館が置かれるなどしていたことが分かる。建武四年の安堵下文に現れる二階堂氏は駿河国出身の鎌倉御家人で在地に出自をもつ豪族ではないから、それ以前には逸見氏などの甲斐源氏一門の土豪が経営主体として想定されて然るべきであろう。

史料の裏づけに欠けるが、鎌倉幕府滅亡後の南北朝期にはこうした駿河国などに出自をもつ鎌倉御家人の地頭たちと在地土豪の流れを汲む勢力との間に緊張が生じていたと推測されるところである。谷戸城跡が「大八田たんぼ」すなわち大八田庄の要にあたる北端に位置していることを偶然とみなすべきではないだろう。谷戸城跡の伝承にいう鎌倉時代初頭の築城を裏付ける史資料はなく、この時期の動向を具体的に示す考古資料も南に隣接する12世紀代の城下遺跡でわずかに検出されるのみであるが、谷戸城周辺の史料、考古資料から推測される南北朝期の緊張に充ちた状況と、谷戸城跡本体での発掘調査結果から、南北朝期に谷戸城跡がもっとも要塞としての役割を期待されていたことは確実視してよいものと思われる。本書で報告する谷戸城周辺の確認調査成果からは、少なくとも鉄砲伝来以後の戦国時代後半期の大規模な戦闘行為に対応した要塞の姿は浮かび上がってこない。大規模な防御施設に欠ける谷戸城跡の姿こそ、南北朝期前後の山城の典型を示しているものといえよう。

参考文献

秋山　敬　2003『甲斐の荘園』甲斐新書刊行会

小宮山隆　1997「八ヶ岳南麓鳩川流域の縄文時代後期遺跡について」『別当西遺跡』長坂町教育委員会

山梨県　2004『山梨県史資料編７中世４考古資料』

第３章　各年度の調査結果

第１節　平成10年度（第４～６図、写真図版１～４）

平成10年度は、谷戸城跡北西の畑地で調査トレンチ６ヶ所を発掘した。この地点は谷戸城跡の北端に残る堀跡らしい凹地地形と地中レーダー探査結果から、堀跡が東西に走ると予想された。

発掘調査の結果、予想どおり東西方向に堀跡が検出された。加えてこの東西方向の堀跡から分岐して南へ延びる堀跡も検出された。

東西方向の堀は断面形が薬研堀状となる空堀で、上幅は推定で８～９m、底幅1.1m、現地表面からの深さは最深3.2m、堀壁の最大勾配は40°に及ぶ。後世、浅く幅広に掘り直されているが、その時期は土層断面観察から東西・南北両方の堀の機能停止後と考えられる。北東角の試掘坑では高く掘り残された地盤が検出されており、薬研堀はここで分断されると想定される。この掘り残された地盤は土橋と思われ、この想定が正しければここが谷戸城大手口とすることができよう。谷戸城本体の二の郭北側の虎口も同じように土橋が堀を遮って設けられている。

南北方向に走る堀は、断面形が箱堀状となる。検出された箱堀の上幅は3.3m、底幅1.1m、現地表面からの深さは2.2m、堀壁の最大勾配は50～60°である。堀の東壁は、東西に走る薬研堀と同様に40°程度の勾配で緩やかだが、西壁は急傾斜で堀底に向かって落ちている。試掘坑断面の土層には、東壁に土砂が流れ込んである程度堆積した後に西壁と同じ急勾配で掘り直された堀壁が観察されることから、南北方向の堀も掘り直されていると判断される。東西方向の薬研堀と同時に南北方向にも片薬研状の堀が掘削されたものの、片薬研状の堀だけが急速に埋まったため箱堀を掘り直したものと思われる。

出土遺物は縄文時代と平安時代の土器破片、中近世の陶磁器破片などであり、堀の時期を明確に示す遺物には恵まれなかった。ただし堀の底面近くで内耳土器の耳状把手破片が出土していることから、堀の時代は14～15世紀頃と推定される。

第２節　平成11年度（第７図、写真図版４）

平成11年度は谷戸城跡の南側で調査トレンチを発掘した。谷戸城跡の南側には山裾から延びる尾根筋があり、現在は宅地、水田、畑地となっている。谷戸城跡から南へ500mほどの地点には、県営圃場整備事業に伴い昭和58年に山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査された城下遺跡があり、10世紀代から12世紀代、平安時代から中世前半頃の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出され、か帯、層輪状土製品、緑釉陶器、耳皿、12世紀代の青磁、白磁破片、常滑甕破片が出土している。特に12世紀代の遺物は谷戸城跡の築城初期に関わる年代であるだけに、谷戸城跡南側には居住施設などが予想された。また、谷戸城跡の北端には先述した堀跡が残ることから、南側でも堀跡の探索が必要と考えられた。ただし、試掘坑を発掘する水田は地権者の同意が得られた地点を選択せざるを得なかった。

試掘坑は東西に長細い水田の形状に従い、東西方向に３ヶ所を順次発掘した。この調査の結果、平安時代の住居跡１軒、土坑１基、自然流路を検出した。住居跡は西端の試掘坑で検出され、出土土器の特徴から９世紀後半の遺構と考えられる。自然流路は北東から南西方向に併行して２条検出された。北東側が高く、南西側が低い。流路内には多量の砂と石が集積し、上層には黒色土と黄褐色土が堆積している。流路内からは流れ込んだと思われる縄文時代の土器破片が出土した。

検出された平安時代の住居跡は城下遺跡の平安時代集落に含まれるものと思われるが、期待した中世初頭頃の遺構、遺物は検出されなかった。

第３節　平成12年度（第８～10図、写真図版５～６）

平成12年度も前年度と同様、谷戸城跡南側の発掘を行った。調査トレンチは地権者の同意が得られた水田

に設定した。前年度は限定された面積の調査で充分な成果が得られなかったため、平成12年度は地権者のご理解のもとに水田全面に及ぶ試掘坑を発掘した。

調査の結果、平安時代の住居跡２軒、地下式土坑１基、溝跡４条を検出した。平安時代の住居跡は９世紀代後半に位置づけられる。地下式土坑はその所在を確認するだけで充分であったが、試掘坑の埋め戻しの折に陥没したため、改めて発掘して記録を作成した。溝跡４条はいずれも東西方向に走り、西側がより深く、溝底に石が集積している点で共通する。この溝跡の形状から、水田化される以前の自然地形は東から西へ傾斜して低くなっていたと推測される。１号溝と４号溝は断面がＶ字形で、１号溝は幅１ｍ、深さ0.5ｍ、４号溝が幅４ｍ、深さ0.1mほどである。これらの溝の埋土観察から、溝は掘削されてからほどなくして埋め戻されていると推測される。これに対して２号、３号溝は非常に浅く、機能停止後に埋め戻されている。溝跡は導水、排水に関わる施設と思われるが、１号、４号溝と２号、３号溝の形状が大きく異なることから、また別の性格も想定すべきであるかもしれない。

第４節　平成13年度（第11図、写真図版７）

谷戸城跡の西側には現在、宅地と農地があり、２軒の住宅が建てられている。地中レーダー探査ではここに遺構の反応を示す地盤が確認されている。平成10年度の確認調査では谷戸城跡の北西部分で大手口と思われる土橋と薬研堀、箱堀が確認されている。こうしたことから、谷戸城跡西側のこの区域に谷戸城跡に関連した遺構、施設が想定された。地形からみても谷戸城跡の西側を南北に流れる西衣川と谷戸城跡本体の山の間に挟まれてやや平坦面が広がるこの区域は、「六の郭」と呼びうる印象を受ける。加えて、２軒の住宅の間を走る道はクランク状に折れ曲がっており、土塁などの施設の影響を受けたものと推測される。

試掘調査は地権者の同意が得られた推定「六の郭」の南東隅に調査トレンチ２本を設定して実施した。調査の結果、時期不明の集石１基が検出されたのみで、出土品も縄文時代と近世以降の土器、陶磁器破片に限られ、中世の遺物は得られなかった。現在も生活されている住宅と周辺であるだけに、広範に調査するわけにもいかず、この調査成果はやむを得ないところである。

第５節　平成14年度（第12～13図、写真図版７）

平成14年度は谷戸城跡の北側の谷地形内の水田で試掘調査を実施した。この場所は中山間地域総合整備事業の一環で公園整備を行う計画地とされていた。加えて、調査地点の東に隣接する水田は「対屋敷（たいやしき）」の地名が残る。また平成10年度の地中レーダー探査で、谷戸城跡の北側にさらなる空堀などの施設が想定されていた。こうした理由から、主に居住施設の検出を期して試掘調査地点を選定した。

試掘調査は東西に広い水田の全域に４ｍ四方のトレンチ８ヶ所を設定して実施した。その結果、地盤上に多数の大小の礫が混じる黒色土が厚く堆積する状況が確認され、現地形から想定される谷地形が過去においても形成されていたことが把握された。黒色土の堆積と礫の分布から、恒常的に水流がある「河川」とは考えられないものの時に東衣川などの氾濫が及ぶ低地であったと推定される。黒色土からは中世の陶磁器破片、銭貨などが出土していて、上流、北側から流れ込んで黒色土中に堆積したものと思われる。

第６節　平成15年度（第14図、写真図版８）

平成15年度は、谷戸城北西で発掘調査を行った。これは史跡環境整備事業史跡等総合整備活用推進事業による史跡谷戸城跡ガイダンス施設建設に伴う記録保存のための発掘調査で、調査経費は旧大泉村の単独負担である。国庫補助事業で実施した本確認調査とは事業上関連しないが、谷戸城跡周辺の状況を理解するうえで不可欠な調査成果と思われるため、ここに調査概要を報告する。

発掘調査は、ガイダンス施設用地2,333㎡の全面を対象に実施し、縄文時代を主とする土坑32基、平安時代の住居跡1軒、平安時代の掘立柱建物２棟、時期不明の溝跡２条と、平成10年度確認調査で検出されていた

薬研堀の北側上端部分を検出した。

平安時代の住居跡は出土土師器の特徴から９世紀後半の遺構と考えられる。掘立柱建物跡は柱穴から平安時代の土師器破片が出土したことから平安時代と判断した。谷戸城跡南側の城下遺跡、平成11・12年度確認調査でも平安時代の集落、住居跡が確認されている。谷戸城を取り囲むように平安時代集落が展開していたものと思われる。

調査区の西端を南北に走る１号溝跡は埋土観察から水路として使用されていたものと判断される。２号溝は薬研堀の近くで確認された浅い溝跡で、ごく一部が残り検出されたのみでその性格は不明である。溝跡はともに時期が確認できなかった。

谷戸城跡に付属する薬研堀は北側法面の一部を検出し、調査対象範囲の確認面から1.5mの深さまでを発掘調査した。北側法面の勾配は約35°である。遺物は出土していない。

第７節　平成17年度（第15図）

先述のとおり平成16年度は旧大泉村が周辺町村と合併し、北杜市が発足した年にあたり、合併に伴う事務が山積していたため、確認調査は一時中断した。

合併後の平成17年度には、谷戸城東側、現在の東衣川左岸で確認調査を実施した。これは平成13年度、14年度、16年度の地中レーダー探査により当該地点に堀跡と思われる遺構の反応が検出されていたためである。

確認調査は地権者の同意が得られた水田に調査トレンチを設定して実施した。その結果、礫を多く含んだ黒色土の堆積が確認され遺物は全く出土しなかった。この黒色土の堆積は東衣川の旧河道と考えることが妥当かと思われるから、地中レーダー探査では旧河道を検出していたものと思われる。

第８節　平成18年度（第16図）

平成18年度は、谷戸城北東の水田を調査地点に選んだ。平成10年度に谷戸城北西で薬研堀が検出されていたが、この堀はさらに東に延びて谷戸城の北側山裾を区画する。この堀がさらに東に延びていくならば谷戸城跡の城域が明確になると期待される。そこで地中レーダー探査で堀跡らしい反応が検出されていた当該地点で確認調査を実施することとした。

確認調査は地権者の同意が得られた水田に試掘溝を発掘して実施した。その結果、平成17年度の調査と同様に、礫を多く含んだ黒色土の堆積が確認され遺物は全く出土しなかった。この黒色土の堆積も平成17年度と同様に東衣川の旧河道と考えることが妥当かと思われるから、地中レーダー探査では旧河道を検出していたものと思われる。

第９節　平成19年度（第17図）

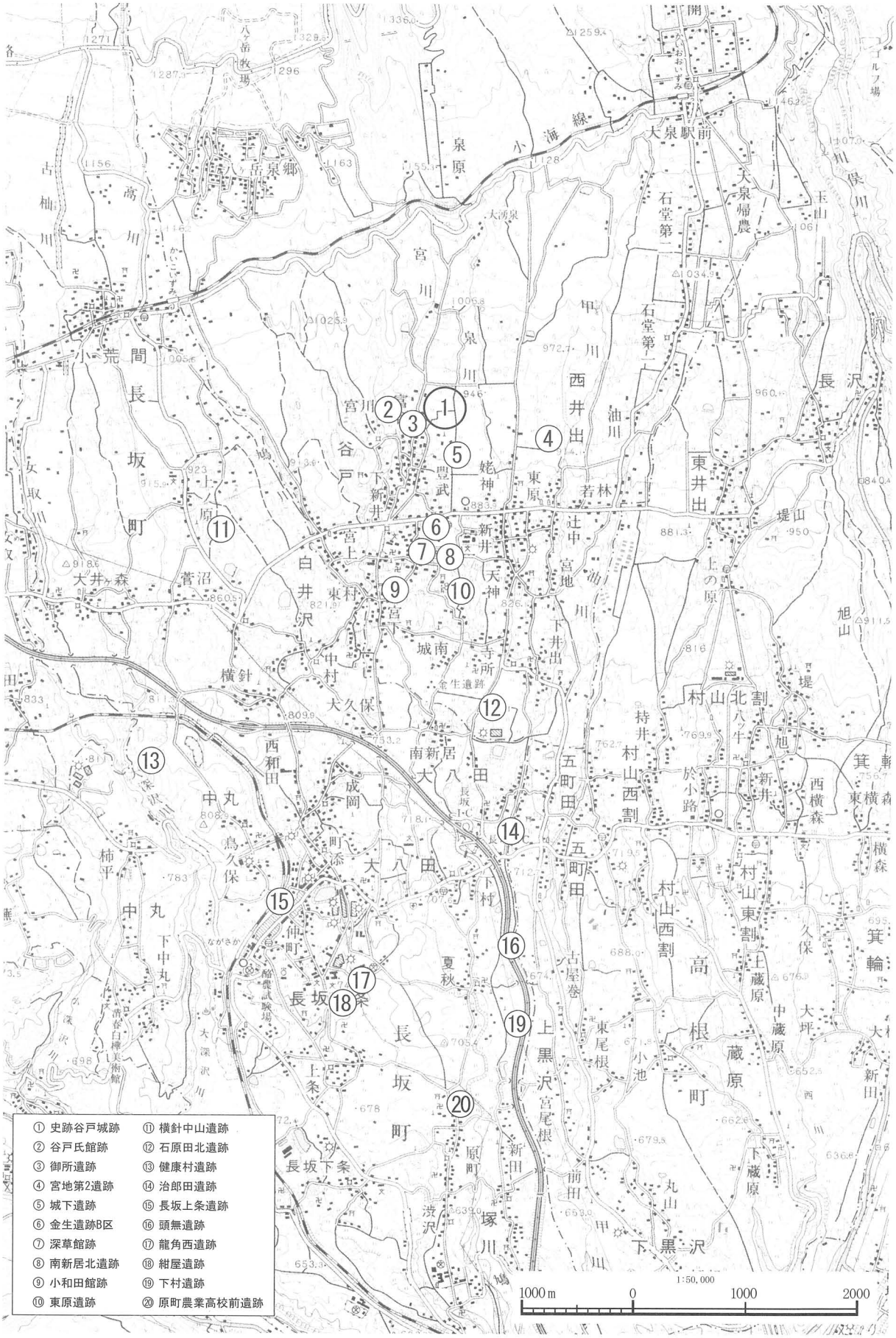
平成19年度も、平成17年度、18年度から引き続き谷戸城北側の外堀の有無を確認するために、谷戸城北側の水田で調査を実施することとした。

平成19年度の調査地点は、谷戸城北端に現状で凹地地形として残る堀跡のすぐ東に隣接する水田で、ここで堀跡が連続して検出されるか否かを確認することとした。

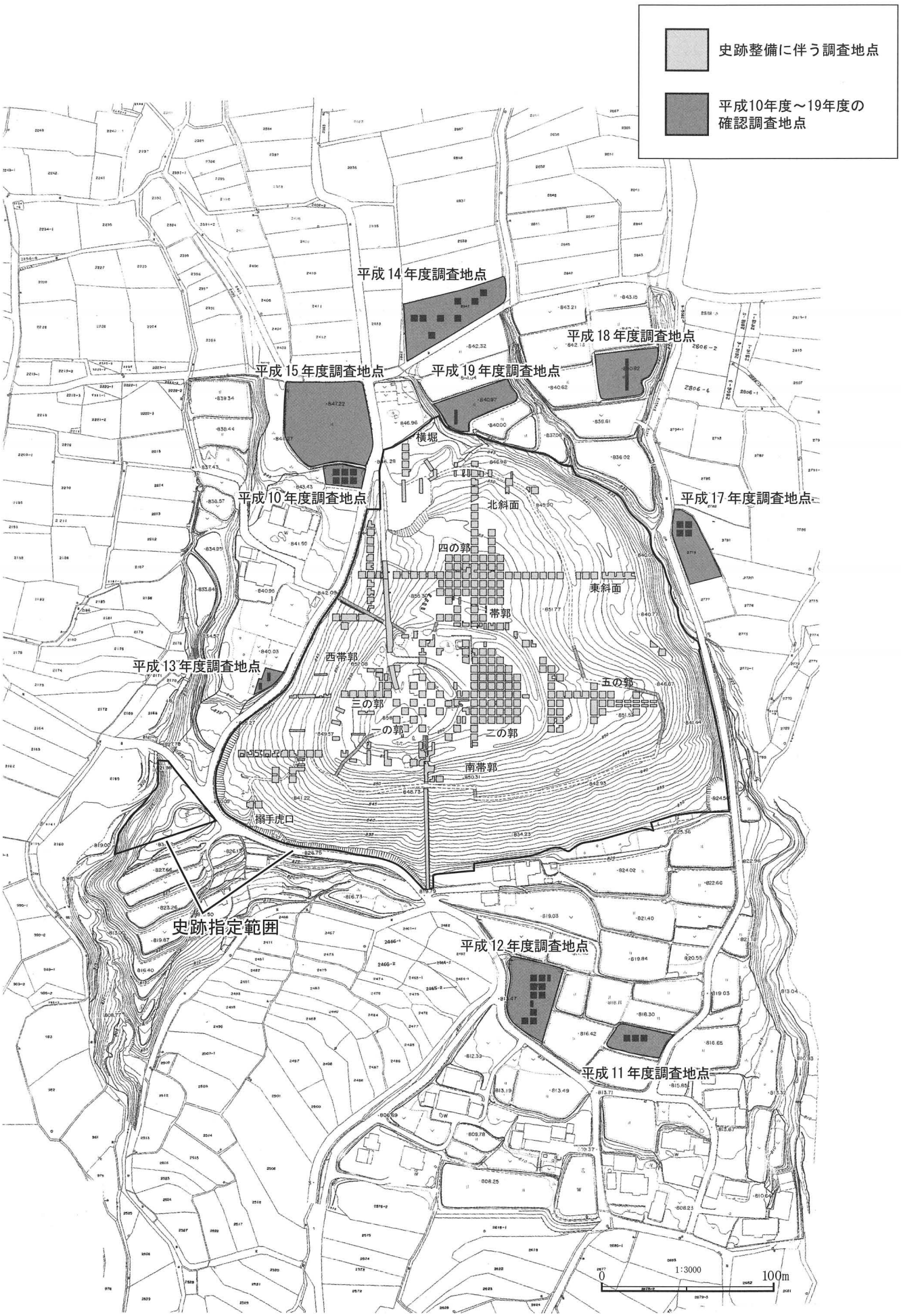
調査の結果、平成17年度、18年度と全く同様の状況となり、ここに至って地中レーダー探査で想定された谷戸城北側から北東側に回り込む外堀は存在せず、東衣川の河道が大きく動いて現在の河道に落ち着いたことが確認されることとなった。

第１表　遺物観察表

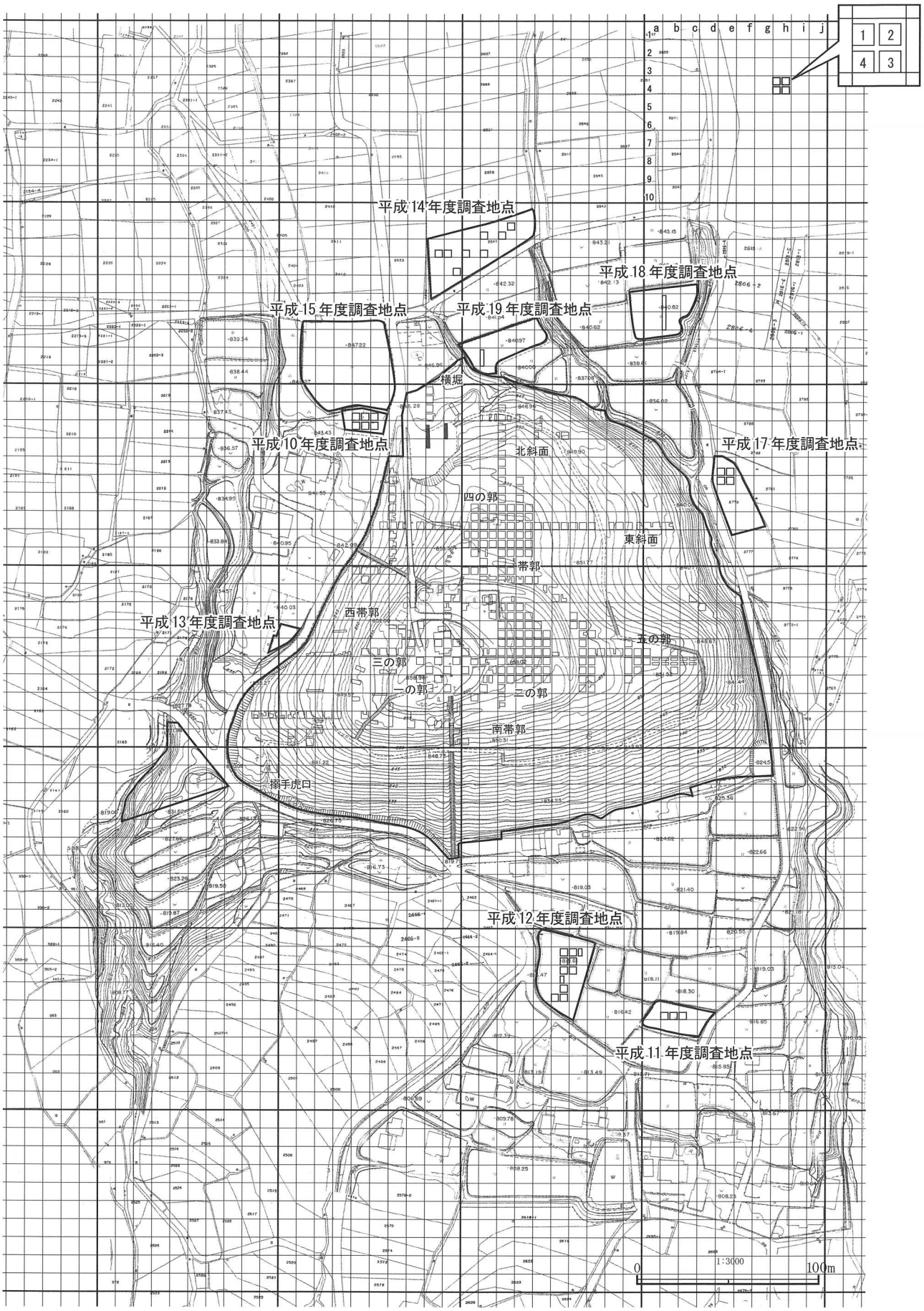
図版番号	注記番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重さ(g)	残存度	胎土色調	胎土の粒子、混入物	特徴、胎土質、釉調、出土位置等
4図1	99ヤト外　e−2−3	内耳土器	−	−	−	32	破片	器外面5YR5/6（明赤褐） 器内面10YR6/6（明黄褐）	長石、雲母が混じるきめの細かい胎土混じる粗粒の胎土	薬研堀内で出土
4図2	99ヤト外　e−3−1	丸碗	(11.4)	−	−	48	1/4	2.5Y6/2（灰黄）	きめの細かい胎土	灰釉丸碗
7図1	ヤト外　1住P37	皿	(12.7)	2.4	4.8	52	1/2	5YR6/8（橙）	長石、石英、雲母、赤色粒子、黒色粒子が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。器外面と底部は回転ヘラケズリ
7図2	ヤト外　1住	坏	(11.4)	4.4	(5.0)	21	1/5	5YR6/6（橙）	赤色粒子、黒色粒子が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。器外面手持ちヘラケズリ。底部ヘラケズリ。
7図3	ヤト外　1住P27	碗	(13.0)	−	−	10	破片	10YR7/1（灰白）	雲母が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。灰釉陶器。
7図4	ヤト外　b−5−4	坏	(15.4)	−	−	23	破片	7.5YR6/6（橙）	長石、雲母、赤色粒子が混じるややきめの細かい胎土	器外面ナデ調整。内面はミガキと黒色処理。
7図5	ヤト外　1住P1	坏	(11.4)	−	−	15	破片	7.5YR6/6（橙）	雲母、赤色粒子が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。器外面手持ちヘラケズリ。
7図6	ヤト外　1住P36	皿	(12.6)	−	−	14	破片	10YR6/4（にぶい黄橙）	長石、石英、雲母が混じる粗粒の胎土	器外面ナデ調整。内面ミガキと黒色処理。墨書あり。
7図7	ヤト外　c−5−4	甕	−	−	−	74	破片	2.5YR3/4（暗赤褐）	きめの細かい胎土	常滑産甕口縁部。
7図8	ヤト外　P17.34.35.42	甕	(13.0)	(18.0)	6.8	152	1/8	10YR5/4（にぶい黄褐）	長石、雲母が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。器内外面ナデ調整。底部静止糸切り。
9図1	01ヤト外カマドP14,SB1カマドP20	坏	(14.4)	5.5	(6.0)	62	1/4	7.5YR7/6（橙）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	器外面ナデ調整。内面はミガキ。底部静止糸切り。
9図2	01ヤト　外SB1カマド.P26	皿	−	−	(6.6)	22	1/6	5YR6/6（橙）	雲母、赤色粒子が混じるきめの細かい胎土	器外面ヘラ削り。底回転糸切り後ヘラ調整
9図3	01ヤト外　f−4−3	皿	13.2	−	−	138	ほぼ完形	10YR5/2（灰黄褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	器外面ナデ調整。内面ミガキと黒色処理。高台欠損。墨書「小」。
9図4	SB1カマドP17,P40	甕	(26.8)	−	−	172	破片	5YR4/6（赤褐）	長石、石英、雲母が混じる粗粒の胎土	1号住居出土。甲斐型甕。
9図5	01ヤト外f−4−2,f−4−3	坏	−	−	(6.6)	26	破片	10YR5/3（にぶい黄褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	須恵器坏。
9図6	01ヤト外1住P54	壺	−	−	−	100	破片	10YR6/2（灰黄褐）	長石、石英、黒色粒子が混じるきめの細かい胎土	1号住居出土。灰釉壺。
10図7	10ヤト外f−2−2	円盤				39	完形	N3/（暗灰）	長石、石英、白色粒子が混じるきめの細かい胎土	円盤状に周縁を打ち欠いた須恵器甕胴部破片。
10図8	8ヤト外f−3−2	甕	−	−	−	160	破片	10YR5/2（灰黄褐）	長石、石英、雲母、白色粒子、赤色粒子が混じる蜜の胎土	常滑産甕胴部破片。
10図9	9ヤト外g−3−1	甕	−	−	−	92	破片	10YR6/6（明黄褐）	長石、石英が混じるややきめの細かい胎土	常滑産（？）甕胴部破片。
10図10	7ヤト外f−2−3	深鉢	−	−	−	45	破片	7.5YR4/3（褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	縄文時代中期初頭、五領ヶ台式。
10図11	2ヤト外f−2−3	内耳土器	−	−	(24.0)	15	破片	10YR7/4（にぶい黄橙）	長石、雲母、赤色粒子が混じる粗粒の胎土	内耳土器の底部破片。
10図12	01ヤト外　f−2−2	鉢？	−	−	−	14	破片	10YR7/6（明黄褐）釉 5Y6/6（オリーブ）	ややきめの細かい胎土	
10図13	11ヤト外g−3−1	高坏	−	−	4.5	23	1/5	2.5Y8/2（灰白）	きめの細かい胎土	仏飯器のような陶器破片。
10図14	3ヤト外f−2−3,HST	深鉢	−	−	−	21	破片	7.5YR5/4（にぶい黄褐）	長石、石英、雲母が混じる粗粒の胎土	縄文時代前期後半、諸磯式。
10図15	6ヤト外g−2−4	内耳土器	−	−	−	59	破片	7.5YR5/6（明褐）	長石、石英、雲母、赤色粒子、が混じる粗粒の胎土	内耳土器胴部破片。
10図16	01ヤト外1住P31	深鉢	−	−	−	62	破片	10YR6/3（にぶい黄褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	縄文時代中期末葉、加曽利Ｅ」式か。深鉢胴部破片。
10図17	12ヤト外f−4−4	深鉢		−	−	58	破片	7.5YR5/6（明褐）	長石、石英、雲母、赤色粒子が混じる粗粒の胎土	縄文時代中期末葉、曽利式。
10図18	5ヤト外f−4−3	深鉢	−	−	−	23	破片	5YR4/8（赤褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	縄文時代後期初頭、称名寺式。
10図19	4ヤト外f−4−3	深鉢	−	−	−	27	破片	10YR5/1（灰褐）	長石、石英、雲母が混じる粗粒の胎土	縄文時代後期前半、堀之内式。
13図1	02ヤト外c−2−4		−	−	−	6	破片	10YR7/2（にぶい黄橙）	きめの細かい胎土	青白磁破片。梅甕か。
13図2	02ヤト外j−4−3	碗	−	−	−	23	破片	2.5Y5/2（暗灰黄）	緻密な胎土	青磁碗破片。釉調7.5Y4/3（暗オリーブ）。
13図3	02ヤト外c−2−4	土鈴				3	1/5	10YR5/6（黄褐）	長石、雲母が混じるきめの細かい胎土	土鈴か？
13図4	02ヤト外f−4−4	深鉢	−	−	−	44	破片	10YR5/3（にぶい黄褐）	長石、石英、雲母が混じる粗粒の胎土	縄文時代前期？土器破片。
13図5	02ヤト外f−2−4	深鉢	−	−	−	14	破片	10YR5/2（灰黄褐）	雲母、黒色粒子、赤色粒子が混じるややきめの細かい胎土	縄文時代晩期？土器破片。
13図6	02ヤト外b−3−4	碗	−	−	(8.5)	40	破片	10YR7/1（灰白）	きめの細かい胎土	平安時代の灰釉碗底部破片。
15図1	05ヤト外e−6−1	壺	−	−	−	9	破片	7.5YR3/3（暗褐）	長石、石英、雲母が混じるややきめの細かい胎土	弥生時代後半〜古墳時代前期の櫛描波状文を施文した壺破片
15図2	05ヤト外c−5−3	坏	(11.6)	−	−	5	破片	7.5YR4/6（褐）	雲母、赤色粒子が混じるきめの細かい胎土	甲斐型土師器坏破片
16図1	ヤト外H18	すり鉢	(16.0)	−	−	9	破片	7.5Y5/2（灰オリーブ）	きめの細かい胎土	瀬戸産卸皿破片
17図1	ヤト外H192800−1		−	−	−	6	破片	10YR6/2（灰黄褐）	きめの細かい胎土	褐釉の小型壺もしくは水滴？
17図2	ヤト外H192800−1	碗	−	−	−	14	破片	10YR8/3（浅黄橙）	ややきめの細かい胎土	近世陶器？
17図3・4	ヤト外H192800−1	内耳土器	(23.0)	−	−	95	破片	5YR2/2（黒褐）	長石、雲母、赤色粒子が混じるややきめの細かい胎土	内耳土器



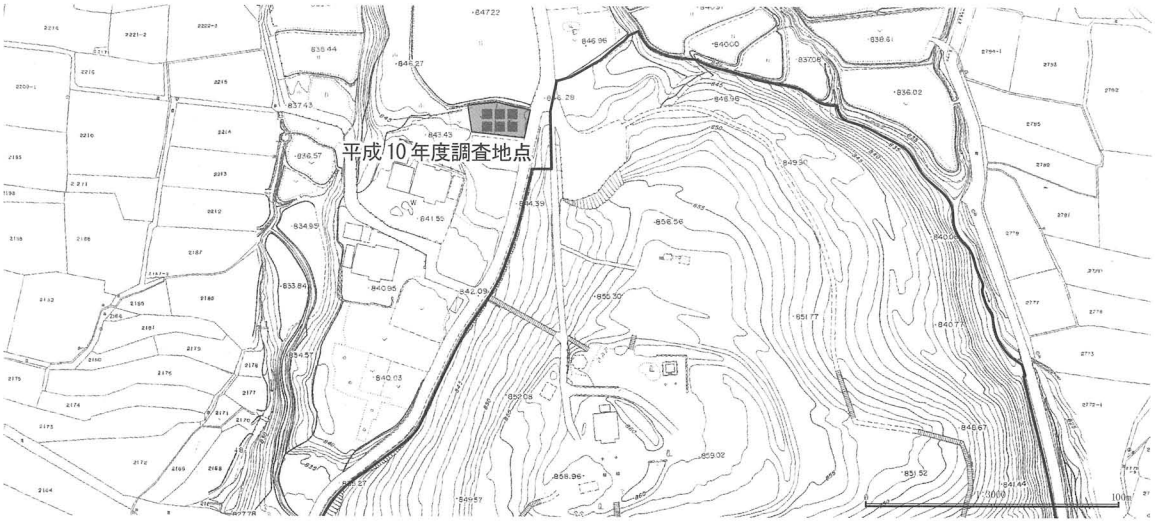
第１図　史跡谷戸城跡と周辺の中世遺跡

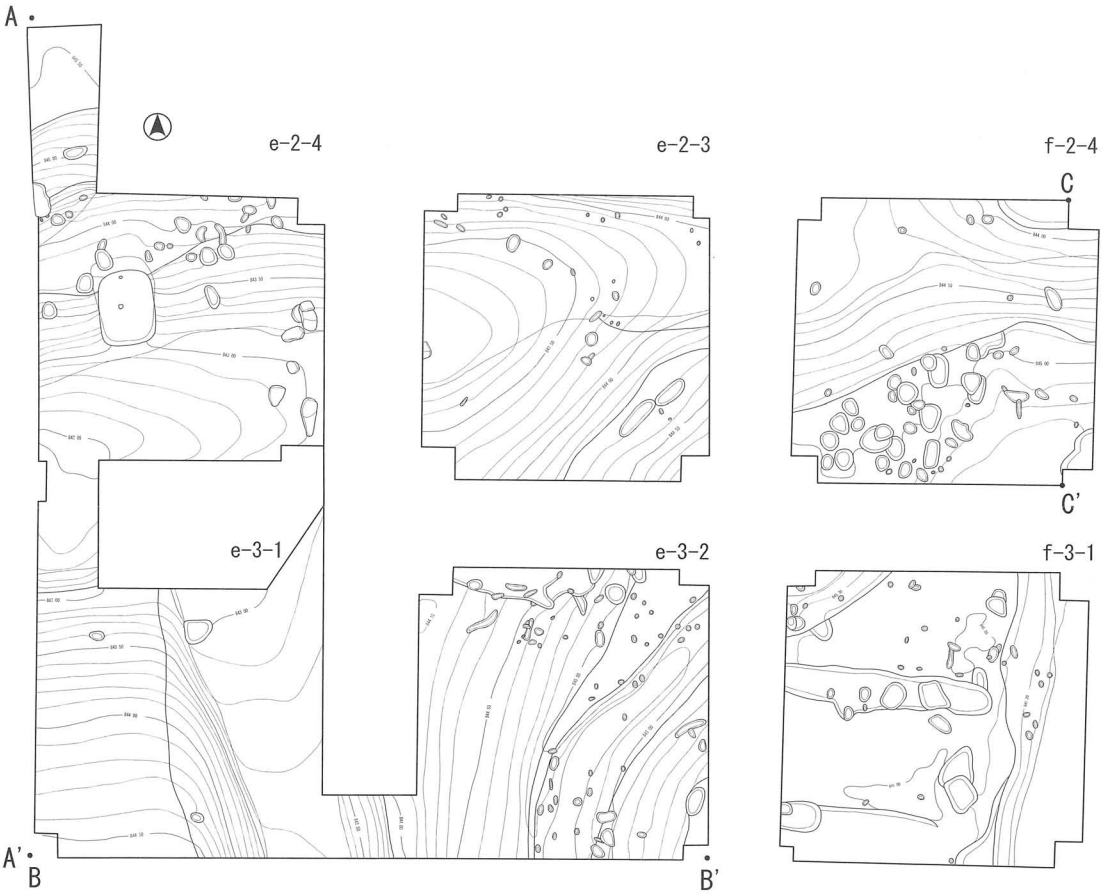


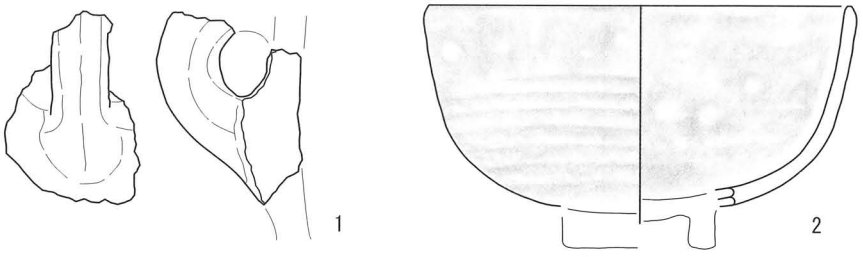
第２図　史跡整備に伴う調査地点と確認調査地点



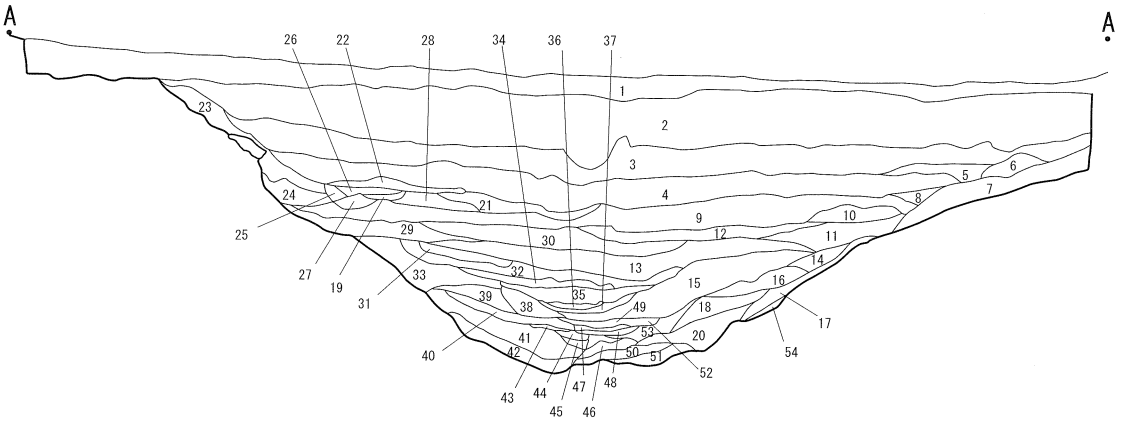
第3図　グリッド配置図・調査地点図





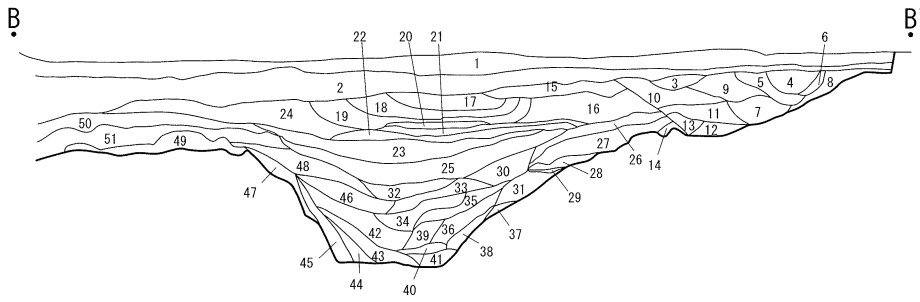


第４図　平成10年度　確認調査トレンチ(1/100)　出土遺物(1/2)



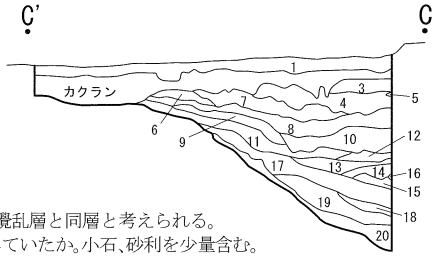
1層　廿土
2層　カクラン
3層　2.5Y3/2(黒褐)　しまり弱　粘性弱　小石(～1cm大)をわずかに含む。
4層　2.5Y3/2(黒褐)　しまりあり　粘性あり　ローム粒(～1mm)をごくわずかに含む。
5層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性あり　微小のローム粒をごくわずかに含む。
6層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性あり　ローム土をわずかに含む。
7層　10YR5/6(黄褐)　しまり弱　粘性あり　ローム土主体層。
8層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性あり　ローム粒(～1mm)を少量含む。
9層　2.5Y2/1(黒)　しまりあり　粘性あり　きめ細かい砂土だが、砂は他と比べあまり含まれない。
10層　2.5Y2/1(黒)　しまりあり　粘性あり　きめ細かい砂土だが、砂は他と比べあまり含まれない。9層より少々濃い土色。
11層　5Y2/1(黒)　しまりあり　粘性なし　ローム粒、ローム土がまばらに含まれる。
12層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　きめ細かい砂質の土。ローム粒(～1mm)を少量含む。
13層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまりあり　粘性弱　粒子の粗い砂質の土。ローム粒(～1mm)を多量に含む。
14層　10YR5/6(黄褐)　しまり強　粘性弱　ローム土と砂の混合層。
15層　10YR5/6(黄褐)　しまりあり　粘性なし　粒子の粗い砂質の土。ローム粒(～3mm)を小量に含む。
16層　10YR6/8(明黄褐)　しまり最強　粘性あり　ローム土と砂の混合層。非常に硬くしまる。
17層　10YR6/8(明黄褐)　しまりあり　粘性強　ローム土に細かい砂が微量に含まれる。
18層　10YR5/6(黄褐)　しまり弱　粘性あり　ローム玉(～3mm)が少量含まれる。ローム土主体。
19層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性なし　ローム粒(～1mm)と砂を大量に含む。流路。
20層　10YR5/6(黄褐)　しまりあり　粘性あり　ローム土と砂の混合層。ロームブロック(3mm大)が数個見られる。
21層　2.5Y2/1(黒)　しまり強　粘性弱　ローム粒(～1mm)を多量に含む粒土が固まったようである。
22層　10YR3/2(黒褐)　しまりなし　粘性なし　小石と砂を多く含む。流路と思われる。
23層　10YR3/2(黒褐)　しまりなし　粘性弱　ローム粒(～3mm)、ブロック(1cm大)を多量に含むほか小石(～5mm)も含む。埋め戻しか？
24層　10YR3/2(黒褐)　しまり弱　粘性あり　ローム粒(1～2mm)を多く含むほか、上層にはブロック(1～5cm)が層のラインに沿って集まるが少量。
25層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性あり　ローム粒(～5mm)を多量に含む。土は粘土質。
26層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性なし　ローム粒(～1mm)を多くに含む。
27層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性弱　ローム粒(～1mm)を多量とブロック(1～3cm大)を数個含む。
28層　2.5Y2/1(黒)　しまあり　粘性弱　微細なローム粒を多量に含む。きめ細かい砂質の土。
29層　2.5Y3/1(黒褐)　しまり強　粘質弱　ローム粒(1～3mm)を多量に含む砂質の土。特に層中央付近にローム粒は集中し、しまっている。
30層　2.5Y3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　ローム粒(1～2mm　1mm大が主)を多量に含む。きめ細かい砂質土。
31層　2.5Y6/1(黄灰)　しまり弱　粘性なし　砂を多量に含んだ黄白色ロームのブロックが主体。黒色土も若干混じる。
32層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり弱　粘性なし　粒子の大きい砂を多量に含む。ローム玉(1～3mm)を小量含む。砂が固まったような層。
33層　2.5Y3/2(黒褐)　しまり弱　粘性なし　32層とよく似ているが、ローム玉(～3mm)を大量に含み、スカスカした感じ。黒色土、ロームブロック(1cm大)の混入もみられる。
34層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり強　粘性なし　ローム粒(1～3mm)とブロック(1～2cm)を大量に含む。粒の大きい砂が固まったような層。
35層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性なし　ローム粒(～1mm)を含むきめ細かい砂を含んだ層だが、あまり砂の入っている印象はない。
36層　2.5Y5/6(黄褐)　しまり強　粘性なし　灰褐土ブロックに粒の大きい砂の混ざったものが主体の層。同色土の土玉が少量含まれる。
37層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　ローム粒(1～3mm)とブロック(1cm大)を含む粘土質の層。
38層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまり強　粘性なし　粒の大きい砂と同色の土玉(1～2mm)が含まれる。砂を固めたような層。
39層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまりｊ弱　粘性なし　ローム玉(1～5mm)を大量に含む。砂とローム玉が固まったような層
40層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまり弱　粘性なし　ローム玉と粒の大きい砂を含んだ層。
41層　2.5Y3/3(暗オリーブ褐)　しまり弱　粘性なし　ローム玉を多く含む(1～5mm)。33層より砂の粒子が細かい。
42層　2.5Y3/3(暗オリーブ褐)　しまり弱　粘性なし　ローム玉を少量含んだ砂質土。ロームブロック(1cm大)もごくわずかにみられる。
43層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり弱　粘性なし　砂を多く含んだローム土層。
44層　7.5Y4/2(灰オリーブ)　しまりなし　粘性なし　ローム玉をわずかに含む砂質土。
45層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり弱　粘性弱　砂質土。
46層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性強　細かい砂を含んだローム土と黒色土の混合層。鹿沼土粒もごくわずかにみられる。
47層　10YR5/6(黄褐)　しまり最強　粘性強　ローム土と細かい砂の混合層。114層と似ているが114層のほうが砂が少ない。
48層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　105層と似ている。黒灰色土とロームブロック(～1mm)の混合層。
49層　2.5Y6/6(明黄褐)　しまり弱　粘性なし　ロームブロックと砂を含んだローム土の混合層。
50層　10YR6/8(明黄褐)　しまり最強　粘性強　ローム土と細かい砂の混合層。部分的に黒色土が層状に入る。
51層　10YR5/6(黄褐)　しまり弱　粘性あり　砂を多く含む。
52層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性強　黒色土とロームブロック(1～2mm)が混ざり合った層。
53層　10YR6/8(明黄褐)　しまり最強　粘質強　ローム土と細かい砂の混合層。
54層　10YR6/6(明黄褐)　地山

第5図　平成10年度　セクション図(1/80)



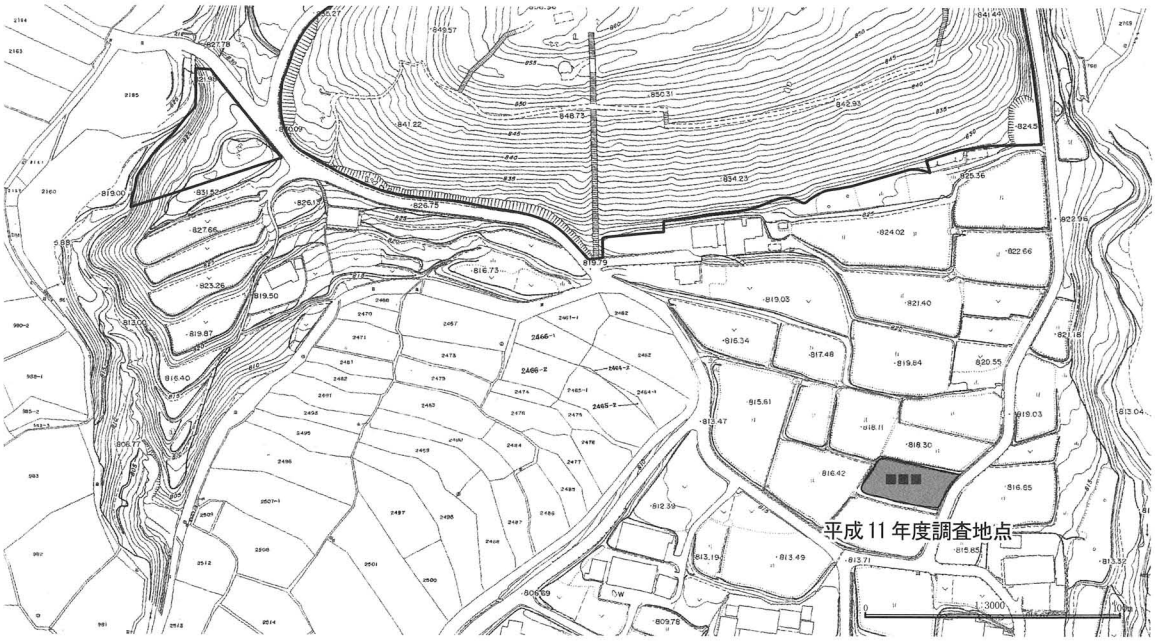
1層　甘土
2層　10YR4/1(褐灰)　しまりなし　粘性あり
石灰が入る。旧甘土か。
3層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性なし
砂の推積はない。撹乱か。
4層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性弱
小石(0.5～2cm大)が多量に入る。
水路だろう。水分多い。
5層　10YR1/3　しまり強　粘性あり
小石(0.5～2cm大)が下方に少量たまる。
水分多い。ローム粒少量含む。
6層　10YR4/2(灰黄褐)　しまりあり　粘性あり
ローム粒を大量に含む。砂粒を少量
含む。水分多い。

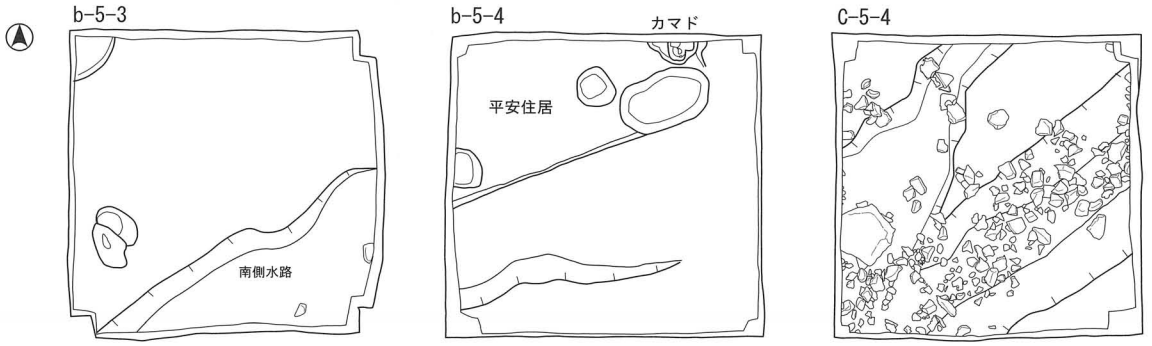
7層　10YR2/1(黒)　しまりあり　粘性あり　西側に小石(0.5～1cm)が集中する。水分多い。ローム粒を少量含む。
8層　10YR4/2((灰黄褐)　しまり弱　粘性j強　ロームブロックが下方にたまり、ローム粒と灰褐色で構成される。
9層　10YR2/3(黒褐)　しまりあり　粘性あり　小石(0.5～2cm大)が微量含まれるほか、ローム粒も少量含まれる。砂の混入が目立つ。
10層　10YR2/3(黒褐)　しまりあり　粘性弱　ローム粒が微量含まれる。
11層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　ローム粒を少量含む。
12層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　水分多い。ローム粒(～1cm大)を少量含む。
13層　10YR4/2(灰黄褐)　しまりあり　粘性強　砂粒が微量含まれる。ローム粒(～1cm大)を多く含む。
14層　10YR5/4(にぶい黄褐)　しまりあり　粘性あり　ロームブロック、灰褐色土ブロックで構成される。
15層　10YR3/2(黒褐)　しまりなし　粘性なし　ローム粒を少量含む。土の玉(5mm大)が推積している。
16層　10YR2/1(黒)　しまりあり　粘性あり　ローム粒をごくわずか含む。砂質の土。
17層　10YR3/2(黒褐)　しまり弱　粘性なし　ローム粒を少量含む。下方に石(～1cm)が推積。流路だろう。
18層　10YR3/2(黒褐)　しまりあり　粘性なし　ローム粒を少量含む。細かい砂とともに、小石(5～20mm)が推積。
19層　10YR3/2(黒褐)　しまりあり　粘性弱　ローム粒を少量含む。砂を多く含み、小石も少量含まれる。
20層　2.5Y3/2(黒褐)　しまりあり　粘性なし　ローム粒を少量含む。砂層。流路。
21層　2.5Y3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　ローム粒を少量含む。同色の土のブロック(5mm)で構成される。
22層　2.5Y3/2(黒褐)　しまり弱　粘性あり　ローム粒を少量含む。中央付近に砂の推積が見られる。
23層　2.5Y2/1(黒)　しまりあり　粘性強　ローム粒(1～３mm)を多く含む。中央付近に砂の推積が見られる。
24層　10YR3/2(黒褐)　しまりあり　粘性あり　ローム土をわずかに含む。
25層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまりあり　粘性あり　ローム粒を少量含む。
26層　10YR5/3(にぶい黄褐)　しまりあり　粘性なし　灰褐色土とローム質土で構成される。砂はあまり含まれない。
27層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり弱　粘性なし　灰褐色土を主体として灰黒色土、ロームブロック(～1cm大)を少量含む。
28層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり強　粘性なし　細かい砂が含まれる。
29層　2.5Y4/1(黄灰)　しまり弱　粘性あり
30層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり弱　粘性なし　ローム玉を多く含む。
31層　10YR5/4(にぶい黄褐)　しまり強　粘性なし　細かい砂が含まれる。土圧で固まったようだ。
32層　2.5Y5/3(黄褐)　しまり強　粘性あり　ローム土も混ざるきめ細かい砂質の土。
33層　2.5Y5/2(暗灰黄)　しまりあり　粘性なし　きめ細かい砂質の土。
34層　2.5Y5/3(黄褐)　しまり弱　粘性なし　きめ細かい砂質の土。
35層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり弱　粘性なし　ローム玉を多く含む。
36層　2.5Y5/3(j黄褐)　しまりあり　粘性弱　ローム玉を多く含む。35層と似るがこちらの方が若干粒が大きい。
37層　10YR6/6(明黄褐)　しまり強　粘性強　ローム土と砂の混ざった層。
38層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまりあり　粘性あり　上方にローム玉を多く含む。36層ほどしまりはない。
39層　2.5Y5/3(黄褐)　しまり強　粘性強　ロームブロック(1～2cm大)と砂が混ざった層。
40層　2.5Y5/3((黄褐)　しまり強　粘性強　39層と似ている。36層があったため分層。
41層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまり弱　粘性あり　水分が多い。ローム玉(～8mm)ロームブロックを少量含む。
42層　2.5Y5/3(黄褐)　しまり弱　粘性弱　きめ細かい砂質の土に小さいローム玉が微量含まれる。
43層　2.5Y3/2(黒褐)　しまりなし　粘性なし　上方にローム玉あり。
44層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまりなり　粘性なし　18層とよく似る。ロームブロックを少量含む点で異なる。
45層　10YR6/6(明黄褐)　しまり弱　粘性強　ローム土、ロームブロック(1～3cm)を主体に構成。
46層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり弱　粘性なし　ローム玉(～5mm)を多く含む。
47層　10YR6/6(明黄褐)　しまり弱　粘性強　ローム土で構成。砂はほとんど含まれない。
48層　2.5Y5/4(黄褐)　しまりなし　粘性なし　小さいローム玉(～3mm)多く含む。
49層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性あり　ローム土をわずかに含む。
50層　2.5Y3/2(黒褐)　しまり弱　粘性弱　小石をわずかに含む。

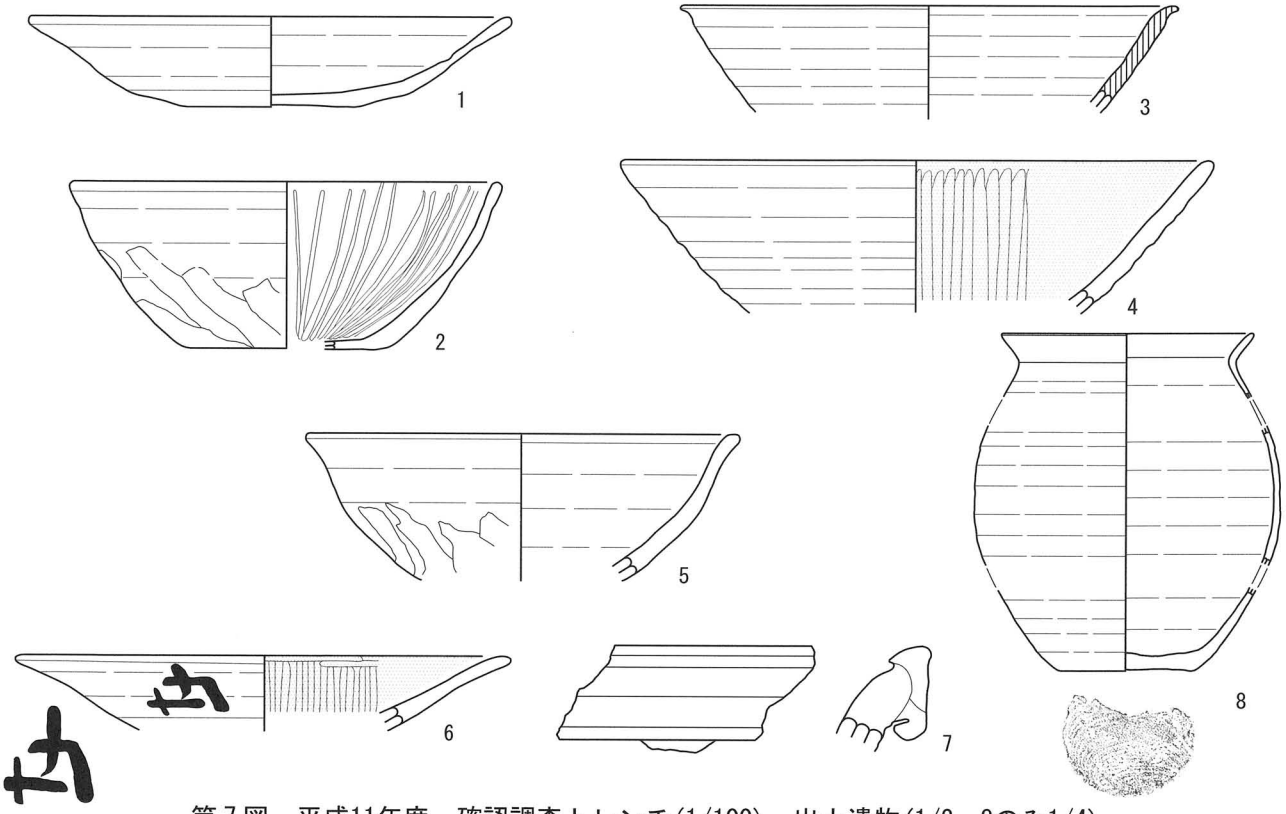


1層　耕作土
2層　撹乱
3層　10YR4/3(にぶい黄褐)　しまりあり　粘性なし　粒子の細かい砂質の土。ロームブロック含む。或いは攪乱層と同層と考えられる。
4層　2.5Y3/2(黒褐)　しまり強　粘性なし　粒子の細かい砂質の土。ローム粒、赤色粒を多量に含む。滞水していたか。小石、砂利を少量含む。
5層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性なし　粒子の細かい土、砂はほとんど含まない。ローム粒を多量に含む。
6層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまりあり　粘性なし　粒子の細かい砂質の土。ローム粒(～1mm)を多くとブロック(１cm大)を微量含む。灰褐土とローム土の割合が半々。
7層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり強　粘性なし　粒子の細かい砂質の土。ローム粒(～1mm)を多くとブロック(１cm大)を微量含む。 灰褐土とローム土の割合が半々。
8層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり強　粘性なし　粒子の細かい砂質の土　ローム粒(～1mm)を多量に含むが、ブロックは含まない。灰褐土が主。
9層　2.5Y4/2(暗灰黄)　しまりあり　粘性なし　土の特徴は8層とよく似ているが、8層に比べ砂の粒子が大きくしまりがない、
10層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまりあり　粘性弱　粒子の細かい砂質の土だが、砂はあまり含まれない。ローム粒(1～2mm)を多量と小石を少量含む。灌水していたと考えられる。
11層　2.5Y2/1(黒)　しまりなし　粘性なし　黄褐色土主体。ローム粒(～mm)を多量に含む。9層よりしまりがない。
12層　2.5Y4/1(黄灰)　しまりあり　粘性あり　黒褐色土を主体とする砂質の土。ローム粒(～2mm)を多量に含む。
13層　2.5Y5/4(黄褐)　しまり強　粘性なし　硬くしまった砂質の土。ローム質土を主体とする。
14層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり弱　粘性なし　砂質の土。ローム土(黄褐色土)と灰色土の混ざった層。
15層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり弱　粘性なし　14層とよく似る砂質の土。14層よりしまりがない。
16層　10YR1.7/1(黒)　しまり弱　粘性あり　黒色土にローム粒を多量に含む。
17層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまりあり　粘性なし　硬くしまった砂層。ローム質主体で灰色土が層状に含まれる部分もある。粒子は粗い。
18層　10YR5/6(黄褐)　しまり強　粘性なし　硬くしまった砂層。粒子は細かい。黄褐色土(ロームの細かくなったものか？)のほぼ単一層。
19層　2.5Y4/3(オリーブ褐)　しまり弱　粘性なし　17層の土とよく似ているが、こちらの方がしまりがない。
20層　10YR5/6(黄褐)　しまり弱　粘性強　ローム質土の流れ込みの層

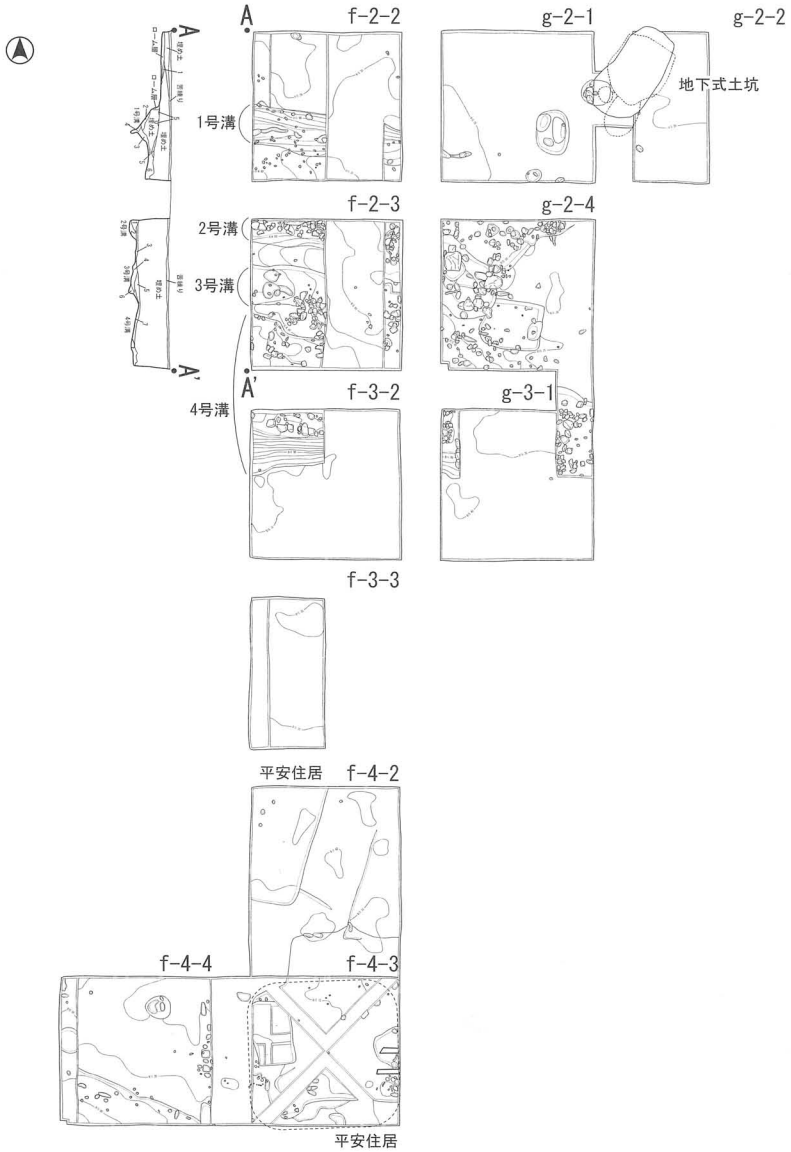
第６図　平成10年度　セクション図(1/80)



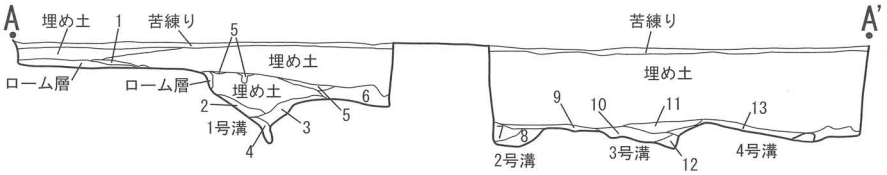


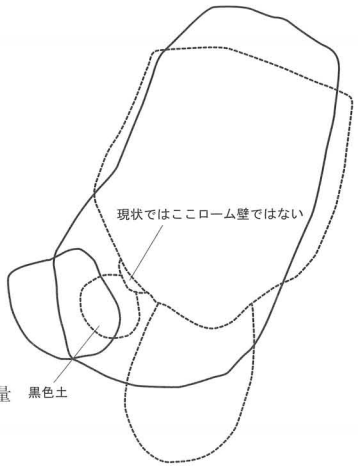


第７図　平成11年度　確認調査トレンチ(1/100)　出土遺物(1/2、8のみ1/4)

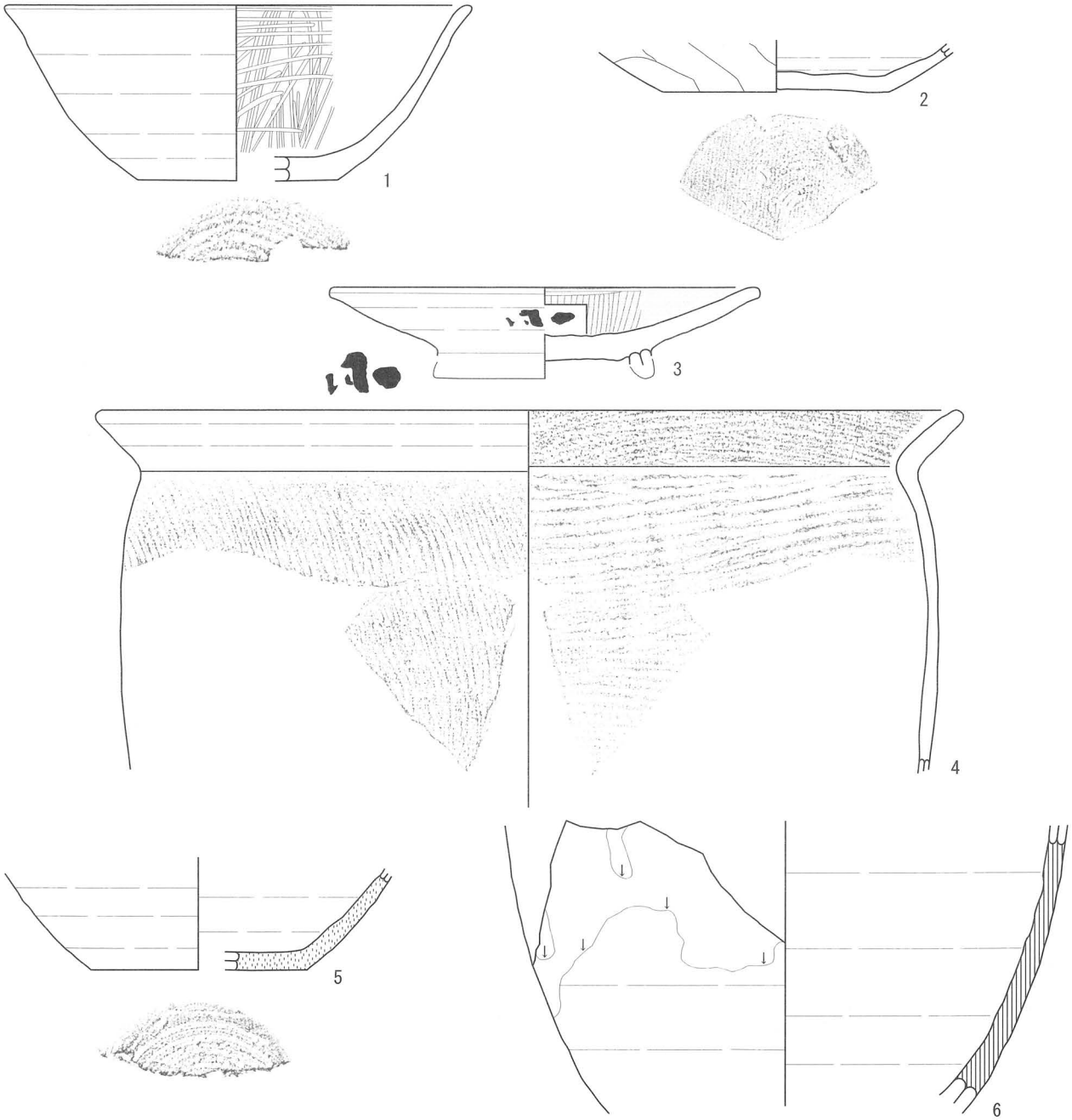


第8図　平成12年度　確認調査トレンチ(1/200)

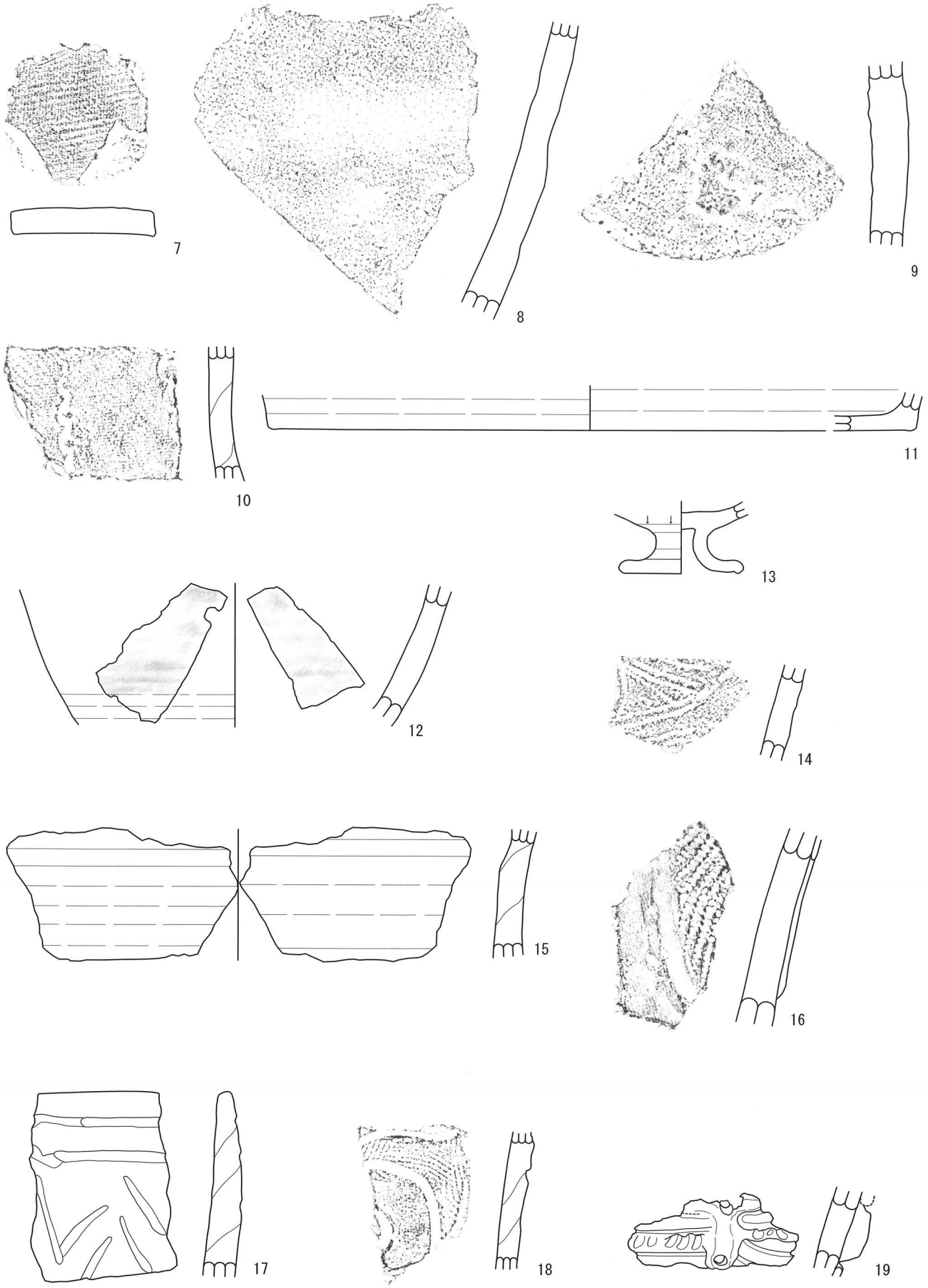




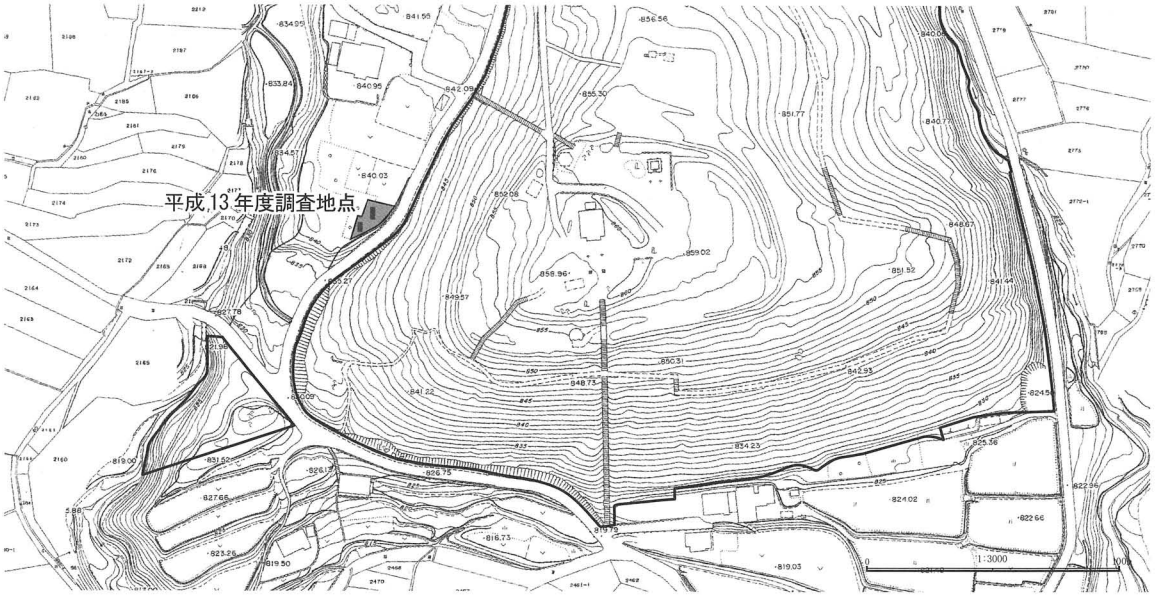
1層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性なし　砂粒を多く含みローム土のゆるい固まりをわずかに含む。
2層　10YR4/1(褐灰)　しまり弱　粘性なし　砂粒を多く含みローム粒を含む。ローム玉(5cm大)を少量含む。
3層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり弱　粘性なし　砂粒をあまり含まない　小石、ローム粒、ロームブロック(1cm大)をわずかに含む。
4層　10YR4/2(灰黄褐)　しまりあり　粘性あり　砂粒、小石をわずかに含む　ローム粒をわずかに含む。
5層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性弱　キメ細かい黒色土、ローム土、ローム玉(～2cm大)をわずかに含む。
6層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　細かい砂粒を含み、ローム粒を多く含む　ロームブロック(1cm大)を少量含む。
7層　10YR4/3(にぶい黄褐)　しまりあり　粘性弱　砂粒を含みローム粒を少量含む。
8層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　砂粒を多く含みローム粒も多く含む　ロームブロック(0.5～1cm)を少量含む。黒色土の粘土質土が含まれる
9層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性弱　砂粒(細かいもの)を多く含みローム粒、ロームブロック(0.5cm大)を少量含む。
10層　2.5Y2/1(黒)　しまり強　粘性あり　黒色粘土質土とロームブロック(0.5～3cm大、0.5～1cm大が主)で構成。砂粒は少量含まれる。
11層　10YR2/1(黒)　しまり強　粘性あり　10層と似ている。黒色粘土質土主体でローム粒を少量含み2～3cm大のロームブロックを少量含む。
12層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　砂粒をわずかに含みローム粒、小石を少量含む。
13層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性あり　黒色土と砂利で構成される。



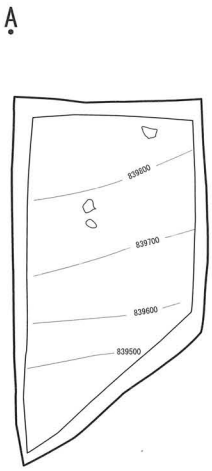
第9図　平成12年度　セクション図(1/80)　地下式土坑(1/50)　出土遺物(1/2)



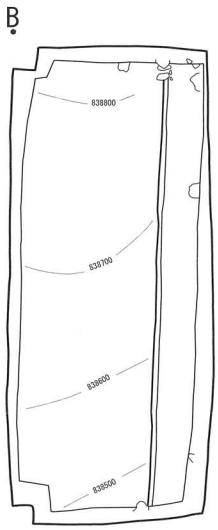
第10図　平成12年度　出土遺物(1/2)

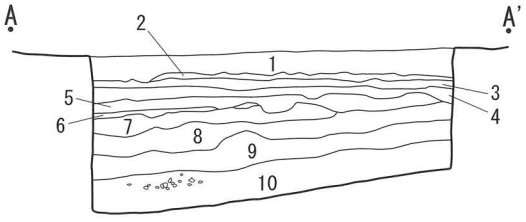


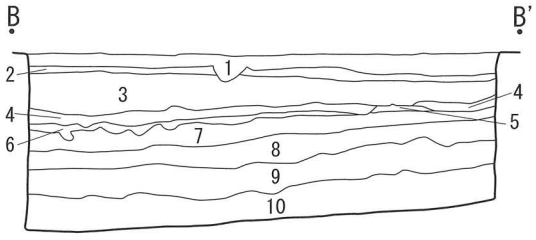
セクション1



セクション2

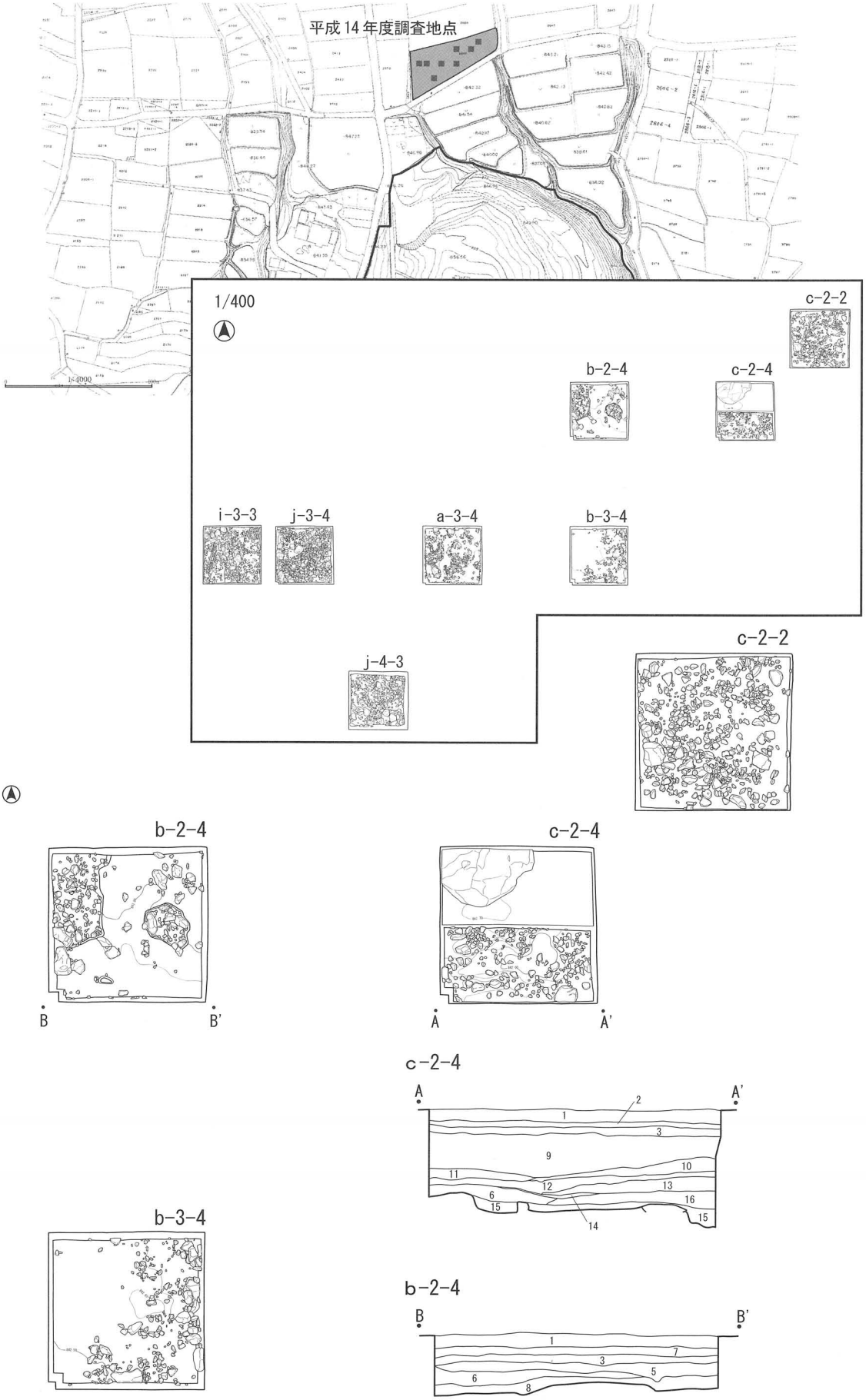




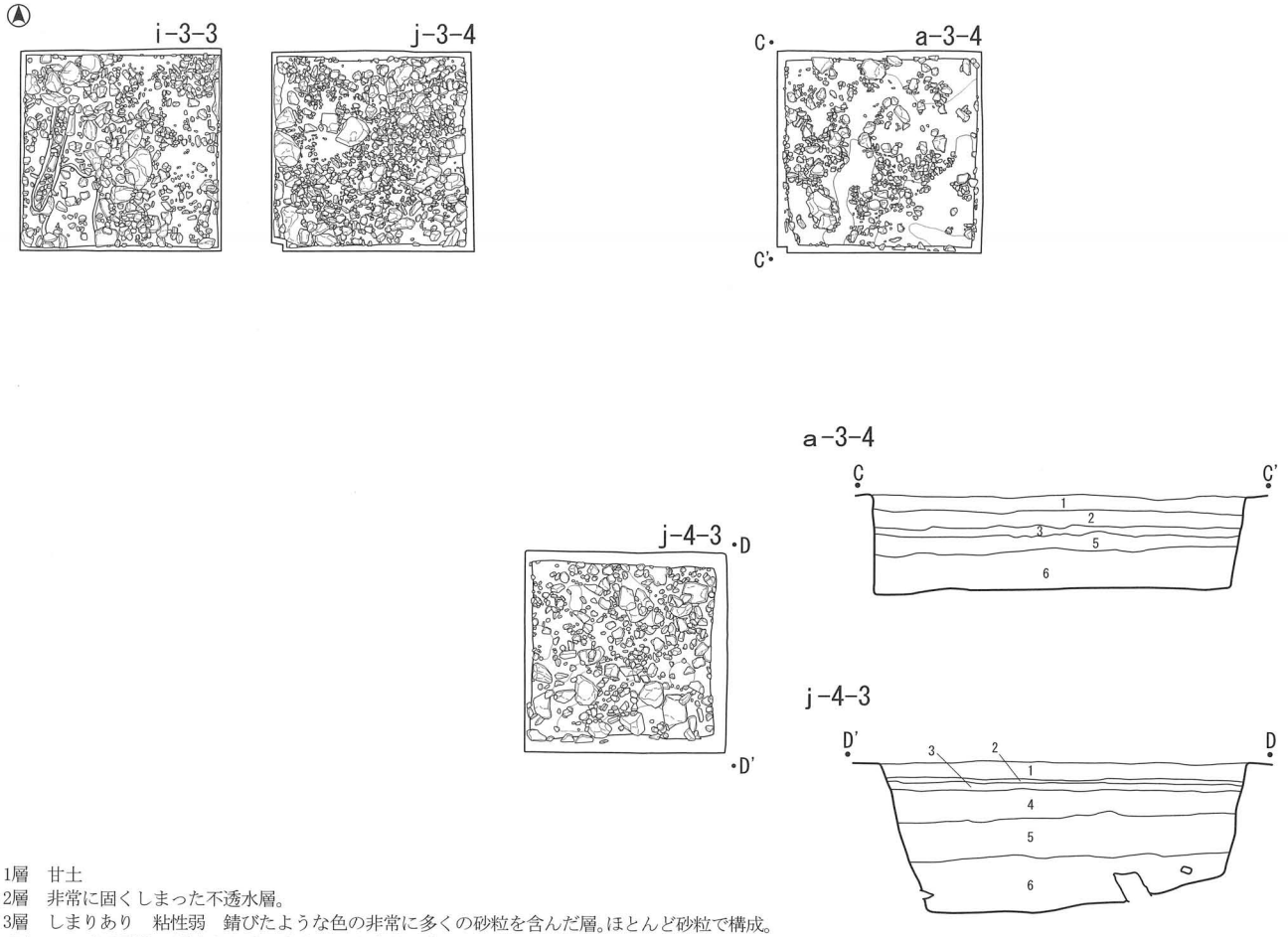


1層　耕作土
2層　7.5YR4/2(灰褐)　しまり強　粘性弱　ローム粒を多く、砂粒を含み、炭わずかに含む。
3層　10YR5/1(褐灰)　しまり強　粘性弱　ローム粒を多く、砂は2層と同じく、炭2と同じく。
4層　10YR4/1(褐灰)　しまり強　粘性あり　きめ細かい砂質の土、ローム粒少、ブロック(0.5～5cm大)わずかに含む。
5層　10YR5/2(灰黄褐)　しまり強　粘性あり　きめ細かい砂質の土　4層より細かい。ロームブロック(0.5～2cm大)を含む。
6層　10YR6/4(にぶい黄橙)　しまり強　粘性強　ローム土を貼っている。
7層　10YR2/1(黒)　しまり強　粘性あり　きめ細かい砂を含む。ローム粒少量、赤色粒ごくわずかに含む。
8層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　きめ細かいローム粒。炭をわずかに含む。きめ細かい砂含む。
9層　7.5YR5/4(にぶい褐)　しまり強　粘性強　赤褐と灰色土の粘った土。炭わずかに、きめ細かい砂含む。
10層　10YR2/1(黒)　しまり強　粘性強　黒色土層　黒褐ブロック(2cm大)、赤色粒わずかに含む。

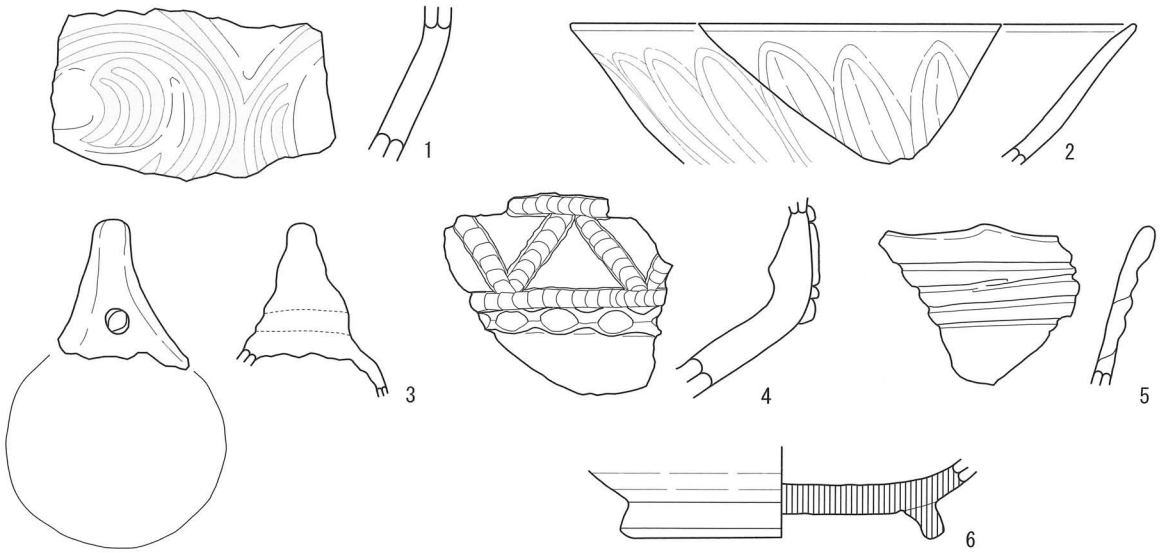
第11図　平成13年度　確認調査トレンチ(1/80)　セクション図(1/80)



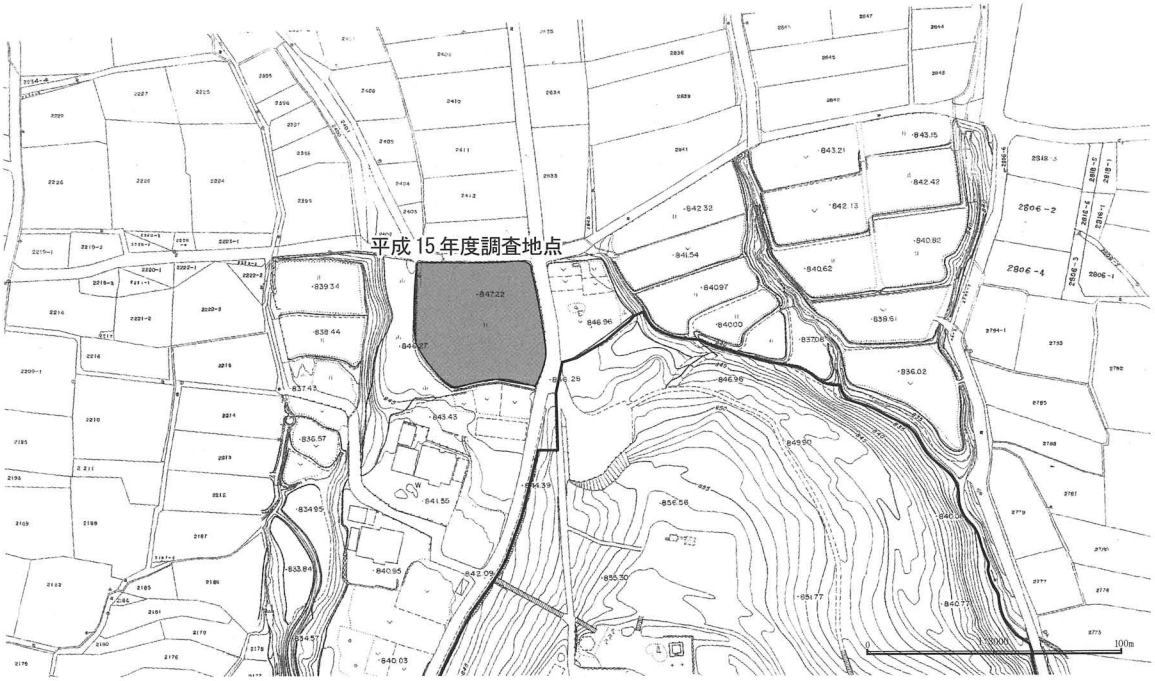
第12図　平成14年度　確認調査トレンチ(1/150)　セクション図(1/80)

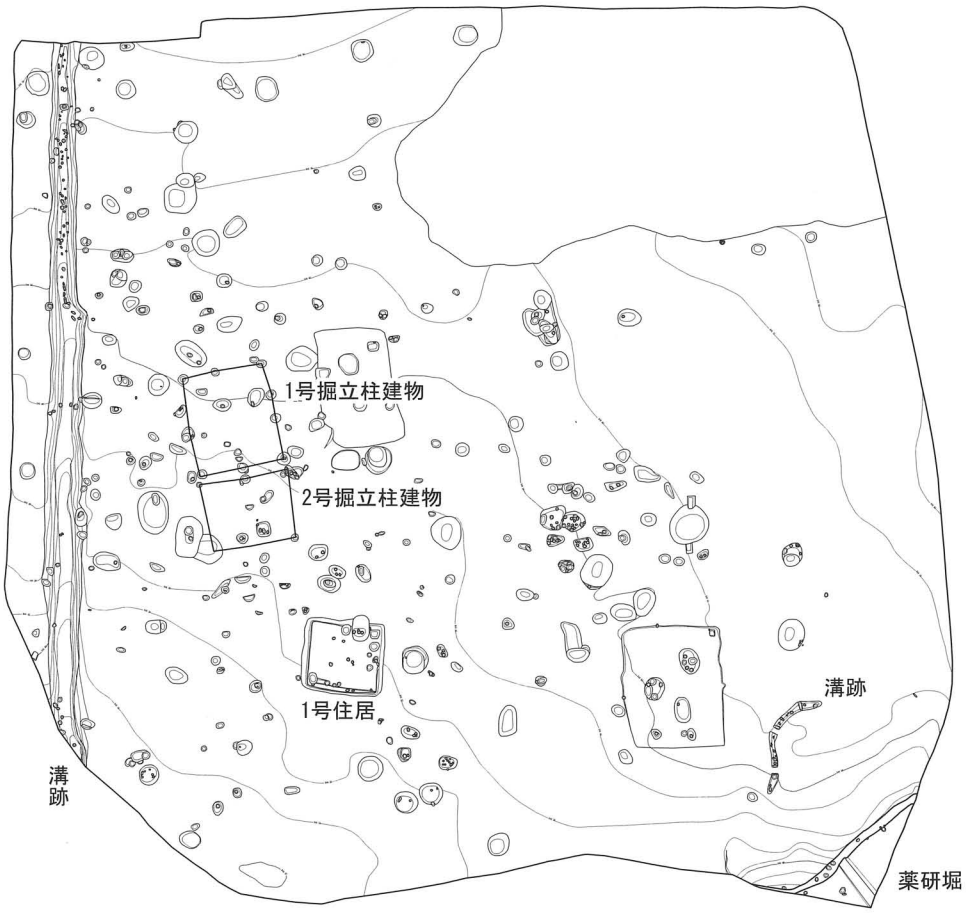


1層　甘土
2層　非常に固くしまった不透水層。
3層　しまりあり　粘性弱　錆びたような色の非常に多くの砂粒を含んだ層。ほとんど砂粒で構成。
4層　10YR3/2(黒褐)　拳大より少し大きい石を多量に含む埋土。石は総じて角が取れている。
5層　10YR2/1(黒)　しまりあり　粘性強　ローム粒、赤褐色粒少量ずつ含み、小石をわずかに含む。
6層　10YR1.7/1(黒)　しまりあり　真っ黒の土。ローム粒、石、褐色粒少量含む。人頭大より少し大きいくらいの石を多量に含む。昔の流路であろうか？石は川原石のように丸くなった物と、割れて鋭く尖る物に分けられる。
7層　10YR4/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　砂粒を多量に含み、ローム粒を含む。赤褐色粒、灰白色粒を少量、小石わずかに含む。
8層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり強　粘性強　ローム粒、ロームブロック(1cm大)を多量に含み、小石、赤褐色粒、灰白色粒を含む、ローム土と土が混じった層。石はそれほど多くない。
9層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　砂粒を含み、小石、砂利を多く含む。ローム粒、赤褐色粒少量含む。埋土の可能性あり。
10層　7.5YR4/4(褐)　しまり強　粘性なし　砂粒で構成される。ローム粒、小石、砂利を含む。
11層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性弱　砂粒を含み、ローム粒を多く、赤褐色粒、小石をわずかに、砂利を少量含む。
12層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性弱　非常にきめ細かい土と砂粒が混じる。10YR6/4の色のブロック(1cm大)を少量含むほか、ローム粒、赤褐色粒をわずかに含む。
13層　10YR4/1(褐灰)　しまりあり　粘性あり　灰色土主体で、10YR6/4の土がブロック(0.5～2cm大)　粒として少量含まれる　ローム粒、赤褐色粒をわずかに含む。
14層　10YR6/3(にぶい黄橙)　しまりあり　粘性弱　きめ細かい土と砂が混ざる層。ローム粒を少量含む。
15層　10YR4/1(褐灰)　しまりあり　粘性弱　きめ細かい土と細かい砂が混ざった層　砂粒が非常に薄い層となって入る　ロームブロック(0.5cm大)をわずかに含む。
16層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性強　きめ細かい砂、10YR5/3の粒を含み、ローム粒、灰白色粒、黒色粒をわずかずつ含む。

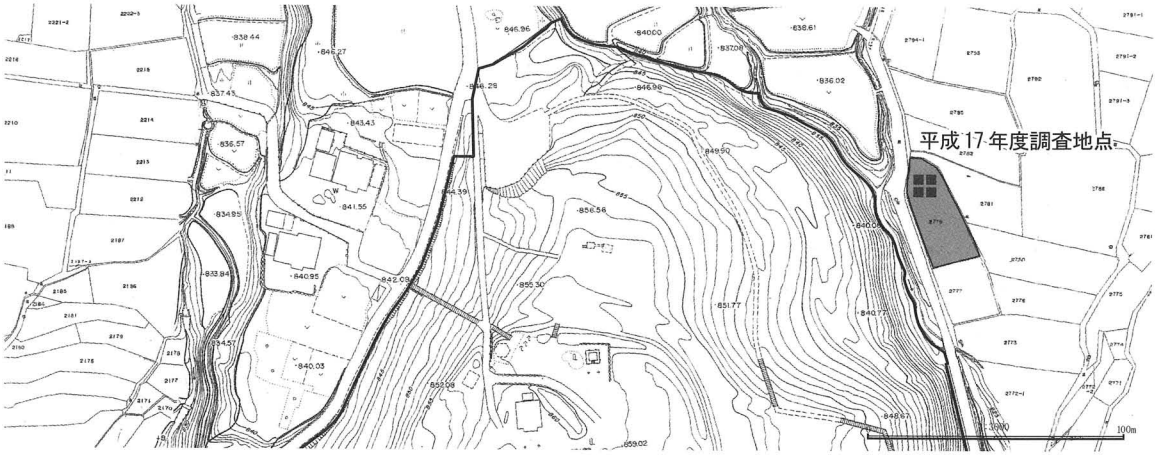


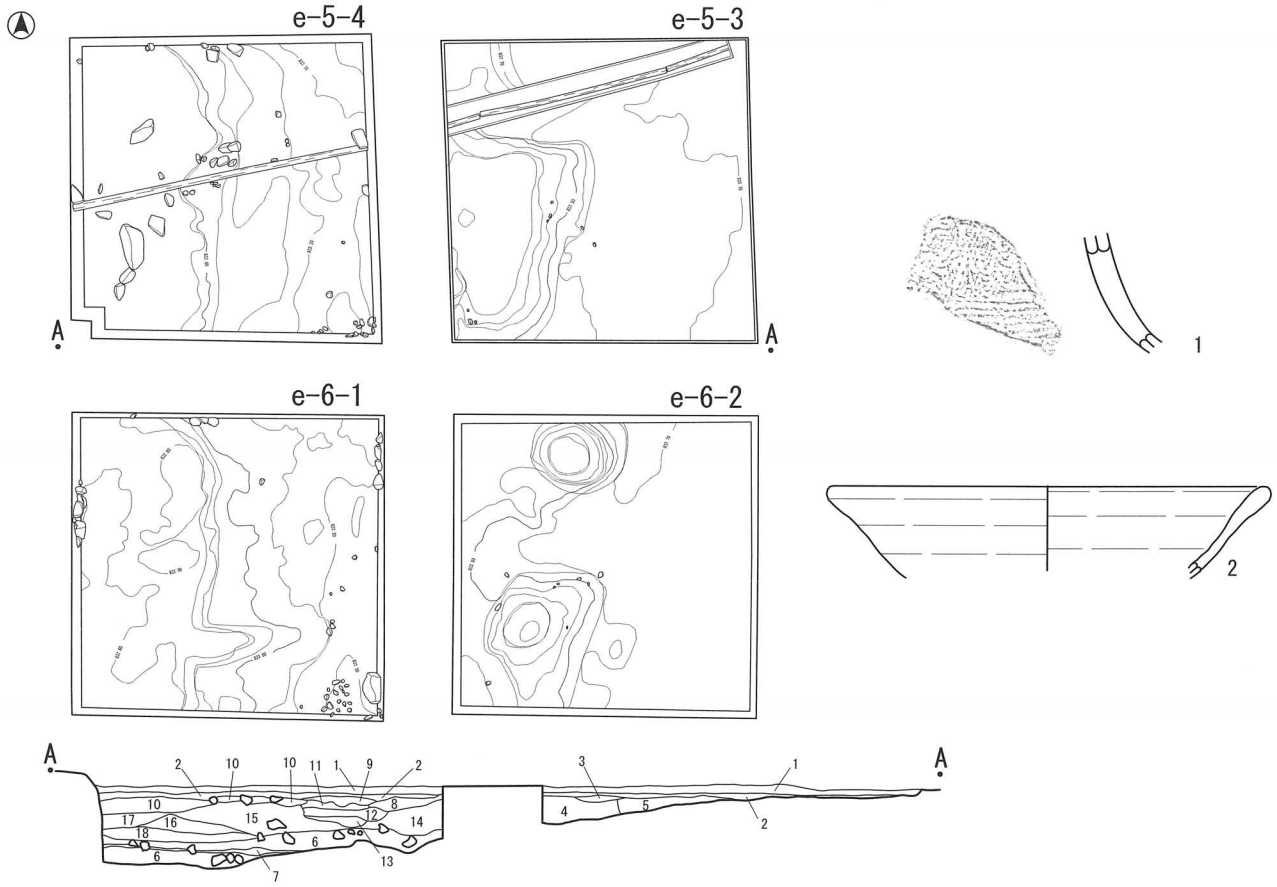
第13図　平成14年度　確認調査トレンチ(1/150)　セクション図(1/80)　出土遺物(1/2、1・3は1/1)





第14図　平成15年度　確認調査トレンチ(1/400)

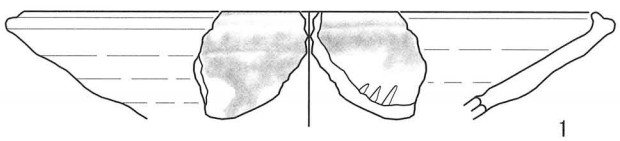


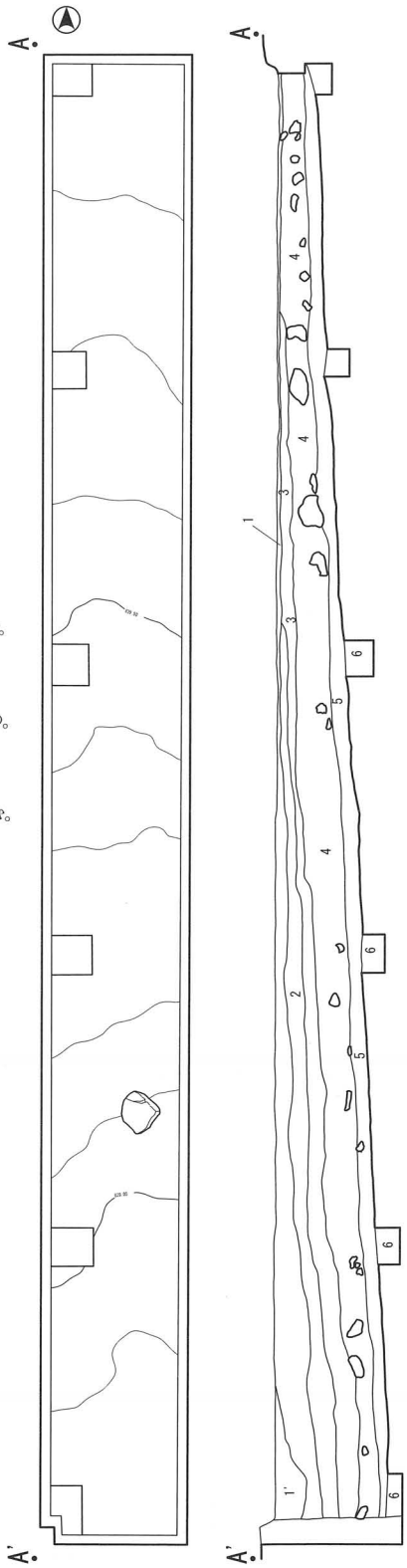


1層　苦土
2層　苦土
3層　10YR3/2(黒褐)　しまり弱　粘性なし　砂で構成。黒色層と褐色層が筋状に入る。
4層　10YR5/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　砂と石(0.5～10cm大)で構成。石は0.5～2cm大が主で、5～10cm大が少量含まれる。
5層　10YR3/2(黒褐)　しまり強　粘性なし　きめ細かい土に砂が含まれる。ローム粒わずかに含む。5～10cm大の石が少量含まれる。
6層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性なし　1mm大の大きい砂粒を含んだ土と5～20cm大の石で構成。
7層　5YR4/4(にぶい赤褐)　サビの発色の強い層。
8層　10YR6/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　砂と小石(～0.5cm大)で構成。
9層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり強　粘性弱　きめ細かい黒色土にきめ細かい砂粒が多量に含まれる。ローム粒わずかに含む。
10層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性弱　きめ細かい黒色土にきめ細かい砂粒が含まれる。17層と似た層。
11層　10YR4/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　きめ細かい砂粒主体の層。きめ細かい土が含まれる。小石(～0.5cm大)をわずかに含む。
12層　10YR2/1(黒)　しまり弱　粘性あり　きめ細かい黒色土にきめ細かい砂粒を含む。小石(～0.5cm大)をわずかに含む。
13層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性弱　きめ細かい黒色土にきめ細かい砂粒を含む。12層に比べて粒が大きく、量も多い。
14層　10YR3/1(黒褐)　しまり弱　粘性弱　砂粒を多量に含み、小石(0.5～1cm大)を含む。
15層　10YR7/1(灰白)　しまり強　粘性なし　きめ細かい土と砂が少量含まれる、石(0.5～20cm大)が主体の層。石は3～5cm大のものが主。
16層　10YR6/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　砂粒と小石(0.5cm大)で構成。
17層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性弱　きめ細かい土と砂粒が主体の土。1～10cm大の石が少量含まれる。主体は1～2cm、5～10cm大はわずか。
18層　10YR6/1(褐灰)　しまり強　粘性なし　砂粒と小石で構成され、きめ細かい土と砂が少量含まれる。石は0.5～2cm大が主。

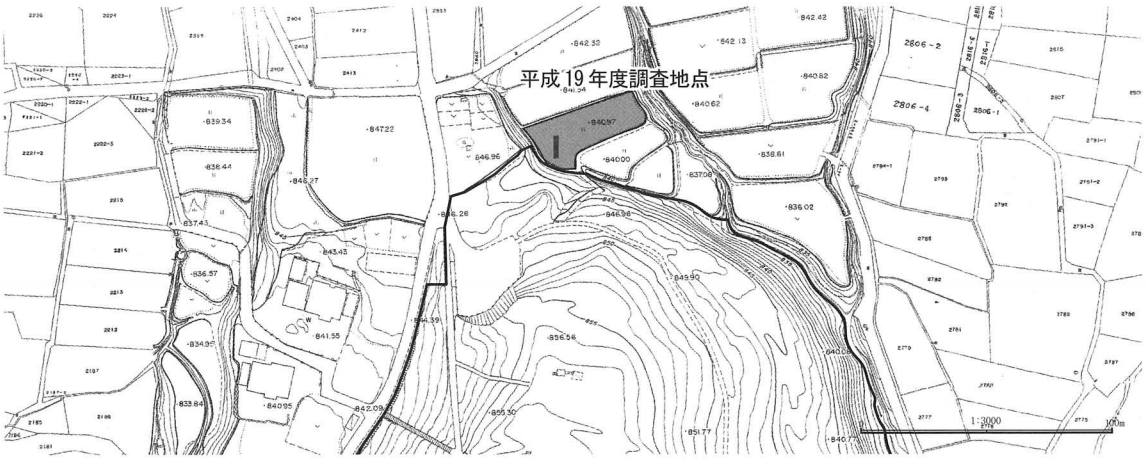
第15図　平成17年度　確認調査トレンチ(1/100)　セクション図(1/80)　出土遺物(1/2)

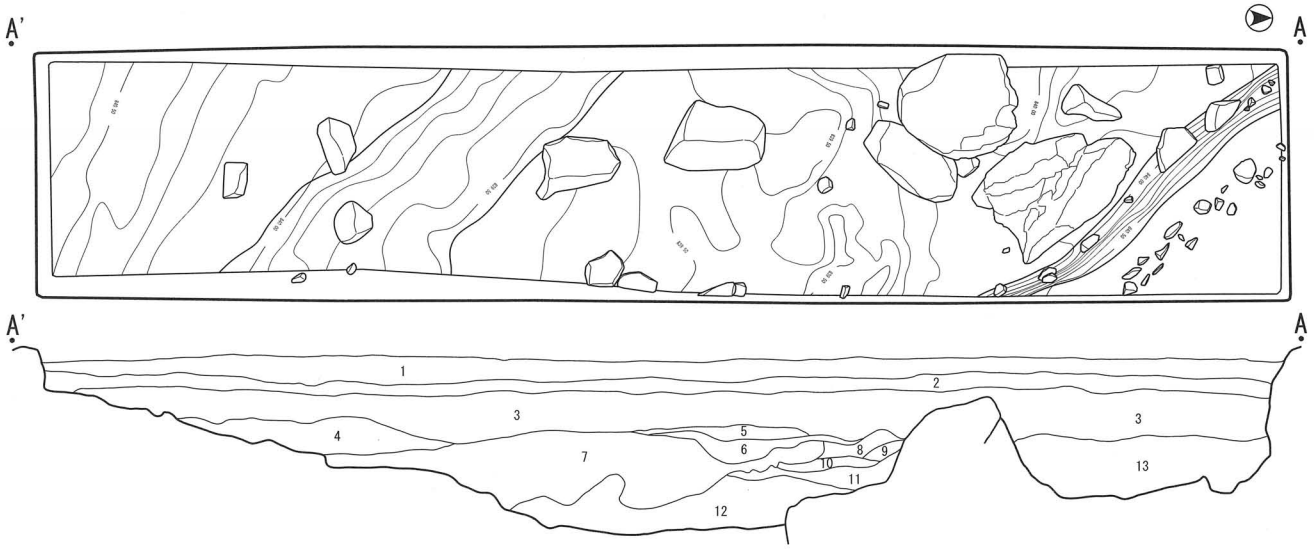
1層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり強　粘性あり　苦土。砂と小石(～2cm大)を多く含む。
2層　10YR3/2(黒褐)　しまりあり　粘性あり　きめ細かい砂を含み、ローム粒を多く含む。小石(～0.5cm大)を含む。
3層　10YR2/1(黒)　しまり強　粘性あり　きめ細かい黒色土、ローム粒を少量含み、小石(～0.5cm大)を少量含む。
4層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性あり　きめ細かい黒色土に石(主は～3cmくらいのもの。拳大のもの多く含み、人頭大のもの少量含む)が多量に含まれる。　水はけがよい。
5層　10YR4/2(灰黄褐)　しまり強　粘性弱　4層と6層が混じった層。砂粒を多量に含む。ローム粒を含み、小石(～0.5cm大)を多量に含む。
6層　10YR5/3(にぶい黄褐)　しまり強　粘性やや強　黄白色粘土層。小石(～3cm大)を含む。
1'層　10YR3/2(黒褐)　しまり強　粘性弱　1層を内容は同じ。色が濃いので分層。



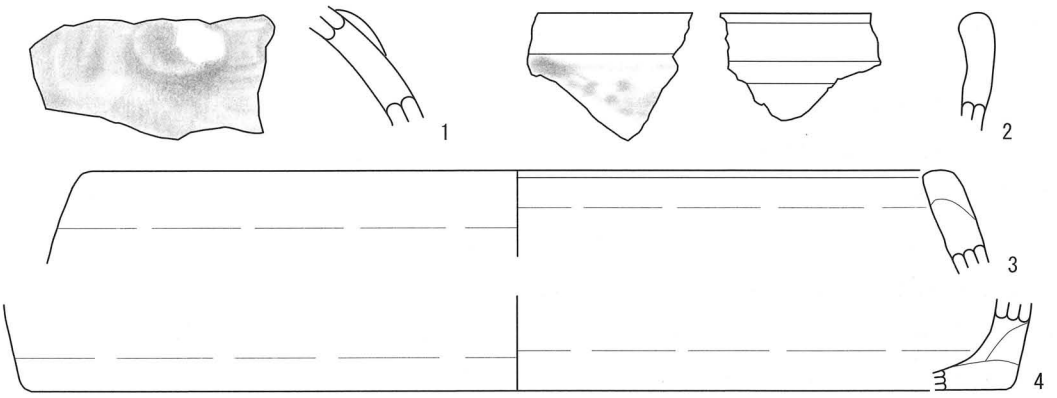


第16図　平成18年度　確認調査トレンチ(1/100)　セクション図(1/100)　出土遺物(1/2)





1層　10YR4/1(褐灰)　しまり強　粘性強　苦練り層。砂粒及びローム粒を含む。
2層　5YR5/6(明赤褐)　しまり強　粘性強　苦練り層下の錆びた色の層。ローム粒、ローム土を含み、小石をわずかに含む。砂粒含む。
3層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性強　砂粒、ローム粒を含み、ロームブロック(～0.5cm大)をわずかに含む。
4層　10YR3/1(黒褐)　しまり強　粘性なし　砂利で構成される。石は～1cm大のもので構成。
5層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性あり　きめ細かい黒色土と砂利(石は～0.5cm大)で構成。ローム粒を含み、ロームブロック(～0.5cm大)をわずかに含む。
6層　10YR1.7/1(黒)　しまり強　粘性強　きめ細かい黒色土主体で、細かい砂粒が含まれる。層の下方に水簸されたようなきめ細かい粘性土が層となって含まれる。静かな水の流れがあったものか？
7層　2.5Y7/6(明黄褐)　しまり強　粘性強　埋土層。ローム土、ロームブロック(～10cm大)、砂粒で構成。水平を意識して盛られており、西壁側が短く東壁側が長いことから、トレンチに対してやや曲がっている。方向は空堀の延長線に一致するように見える。
8層　10YR6/2((灰黄褐)しまりあり　粘性強　埋土の土と黒色土が混じった土。砂粒含み、埋土層北側に見られる灰色粒土を含むほか、ロームに含まれる白色粒(～0.3cm大)、橙色粒(～0.3cm大)を少量含む。
9層　10YR2/1(黒)　しまりあり　粘性強　きめ細かい黒色土主体で、細かい砂粒、ローム粒含む。ロームブロック(0.5～2cm大)をわずかに含む。6層に似ている。
10層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性強　土の特徴は9層と同じだが、やや灰色がかっているので分層。
11層　10YR5/2(灰黄褐)　しまりあり　粘性強　きめ細かい黄灰色土主体で細かい砂粒を含み、ローム粒を多く含む。ロームブロック(～1cm大、主は～0.5cm大)を含む。
12層　10YR2/1(黒)　しまり強　粘性なし　砂利の層。石は～1cm大が主だが、大きいものは5cm大程度まで。ローム粒が含まれる。
13層　10YR3/1(黒褐)　しまりあり　粘性強　きめ細かい黒色土主体で、砂利層(石は～0.5cm大が主、3cm程度の大きさまで)が薄く数層入る。ローム粒を含む。



第17図　平成19年度　確認調査トレンチ(1/60)　セクション図(1/60)　出土遺物(1/2、1のみ1/1)

第４章　確認調査の総括

第１節　谷戸城跡内の導線と城域の推定

谷戸城跡内の導線の推定

史跡谷戸城跡には絵図面等、復元に際し有効な一次的情報は残されていない。そのため発掘調査や、地中レーダー探査を用いて指定地内の導線の推定をしてきた。これらの成果から逆に明治33年に作成された分権図を見ると、谷戸城が機能していた段階（15世紀代）のさまざまな規制が残されているのではないかと推定するに至った。

具体的には現状ではあまり遺存具合が良好とはいえない西帯郭1の北側部分が分権図に残された旧公道と一致し、これから西帯郭１を辿って城南面に至り、南帯郭１を通り二・三の郭南虎口正面に至る導線が推定された（整備に際しては遺存度の良好な西帯郭２を通るルートをメインの導線とした）。また、西帯郭１から途中東に斜面を登り、四の郭に至った旧公道は、虎口位置から北帯郭に入り五の郭に伸びていく。一方、四の郭から直進する旧公道は、二・三の郭北虎口を通り発掘調査で明らかになった土橋を渡り二の郭に至る。更に、北東斜面に沿って空堀が展開するが、この空堀上に分権図上の公道が位置し、東竪堀２や１の南まで延びている。この部分については本来的な導線は東竪堀２までと考えられるが、その後の土地利用により東竪堀１の南まで延伸されたものと考えられる。

以上は遺構の遺存が良好で、地形的な制約により谷戸城が機能していた段階の規制が土地利用に反映された可能性を残すものの、分権図に残された旧公道の意味を考え直す契機となった。

谷戸城跡の城域の推定

旧小字の位置と分権図から旧公道を示したのが第18図１である。幹線を太い実線で、分権図上で細い公道として示されたものを細い実線で示した。導線の大きな傾向として、谷戸城跡の南東、城下集落と北西に位置する町屋集落を結ぶルートが幹線となる。現在、西井出の天神集落とこの町屋集落を結ぶ市道中央道線は細い道として表現され、蛇足ではあるが明治８年の谷戸村・西井出村の合併後も明治33年の段階では重視されていなかったことも見て取れる。

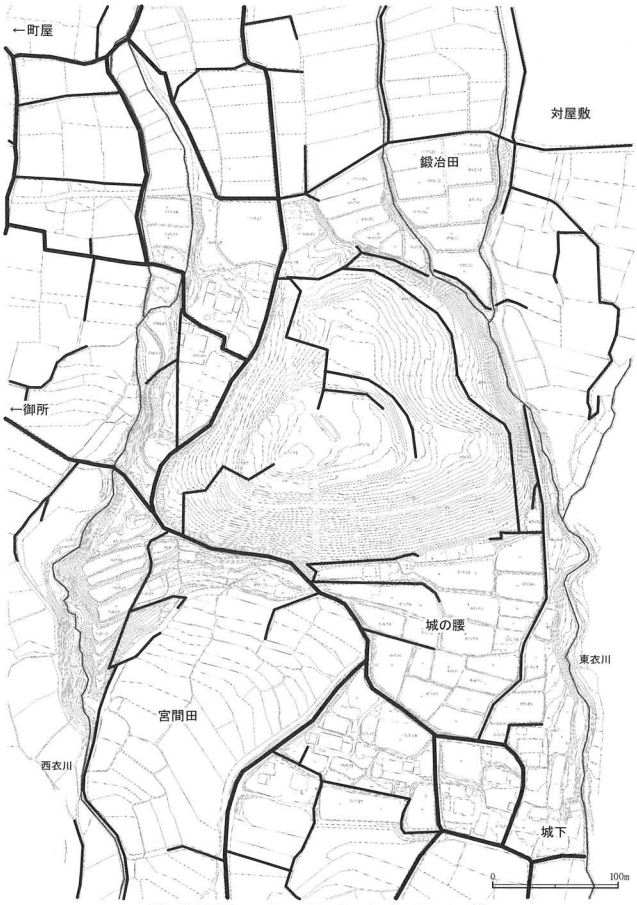
第18図２には想定される居館の位置、平成12年度から16年度に実施した地中レーダー探査で推定されるに至った横堀から谷戸城跡の北東～東側に大きく展開する空堀の推定位置と谷戸城内の遺構の配置を示した。これらの居館は全て同時存在したのではなく、変遷があったものと考えられる。谷戸城跡の南東部に位置する城下方形居館は南接する城下遺跡の出土遺物から初期甲斐源氏に関する居館の可能性が想定される他、谷戸城跡の六の郭としている谷戸城跡の現況の指定範囲に西接する部分は規模の大きな土塁、あるいは北側横堀の展開など既指定の一～三の郭などの遺構に類似し、谷戸城跡の主な遺構の整備時期である15世紀代に機能していたことが想定されよう。北方形居館とした部分は、分権図作成段階で役場敷地として表記されているが、明確な伝承は残されていないものの最終段階まで機能した居館であった可能性が指摘されるほか、谷戸城とは切り離された谷戸城の前衛的な防御施設であった可能性も考慮される。城下塁跡については明確に時期を推定する根拠は現状ではない。これらの分布動向を見ると北方形居館以外は全て横堀の南側に展開しており、この横堀の性格を明確に示すものと考えられると共に、北方形居館の異質性も明確にする。

第19図１は、18図２に18図１で示した公道をプロットし、更に旧字名で対屋敷とされた部分と鍛冶田と呼称される古銭が発見された地点を居住空間と想定して表記した。谷戸城跡の機能した段階で城下集落と町屋集落以外に谷戸城跡北西部に集落、居住空間と想定される地点があったことを注目しておきたい。また、この居住域とした部分から南に細い公道が地中レーダー探査で推定されるに至った横堀の想定ラインの内側に入ってきているほか、この想定ラインに沿って東側に展開し、東衣川の近くまで延びている。谷戸城の斜面裾とこの地中レーダー探査で推定された横堀に囲繞された空間は緊急時に居住域から避難するための「小屋」

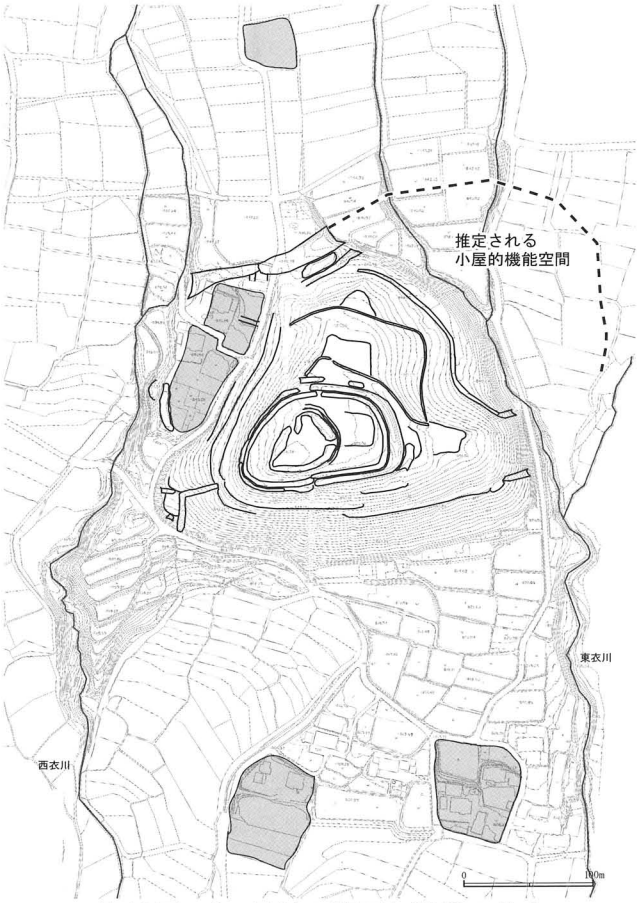
的機能空間と推定することができよう。但し、数度の試掘調査の結果からはこの横堀の延長は把握できず、この範囲までを谷戸城の城域とすることは現状では困難と考えられ、「小屋」的機能空間の推定に留めたい。

第19図２に推定される谷戸城周辺の導線を示した。通常時の城内に至る導線、緊急時に防御するための導線、また、「小屋」的空間に避難する導線を想定した。「小屋」的空間への避難導線は先に述べたものの他に城下集落から東衣川沿いに入るルート、北側大手をとおり、北側山裾から入るルートが想定されよう。防御ルートについては城内の記述は割愛するが、宮間田という低い谷状地形を挟んで丸山地区のルートが防衛上重要となるものと考えられる。丸山は『甲斐国志』等に逸見清光の墓が置かれた場所と記載されているが、現在は失われ、15世紀代のものと想定される宝篋印塔の反花座が残されている。地形的には掘り割りにより谷戸城から切り離されているが、本来は一体の尾根であり、流れ山地形の先端部に位置する。ここにも細い公道が宮間田に面して配され、谷戸城と一体の防御ラインが形成されていたものと想定される。

第19図３に以上の検討から推定される城域の想定図を示した。繰り返しにはなるが谷戸城北東部に「小屋」的機能空間の存在を推定することができるが、実際に横堀からの延長の堀が確認できていない現状ではこの部分を城域に含めることは困難と判断される。翻って、丸山地区から延びる南東尾根先端部は谷戸城と一体の防御的性格を強く持ち、城域とするのが適当と判断した。

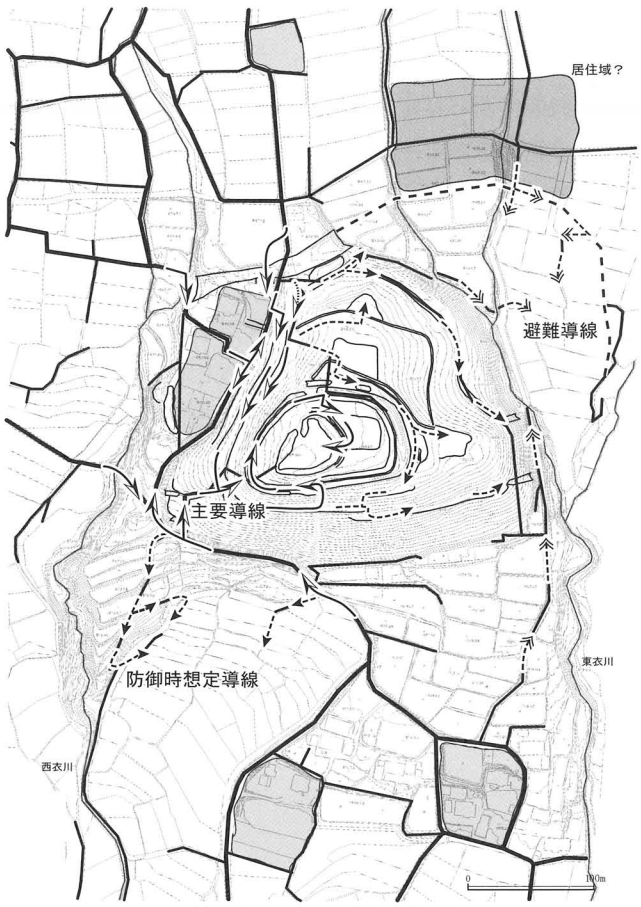


第18図－1　旧小字と旧公道

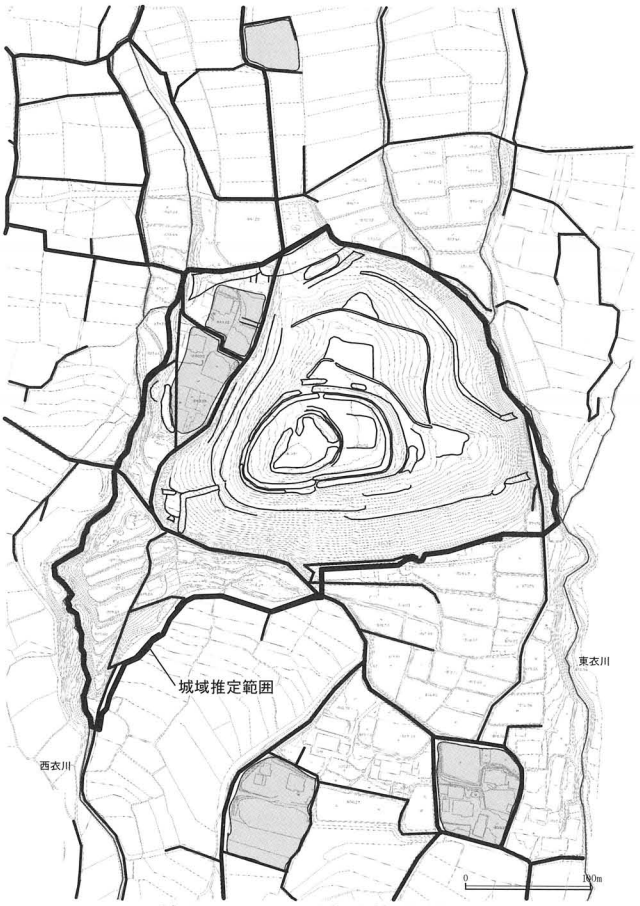


第18図－2　居館の範囲と遺構の分布

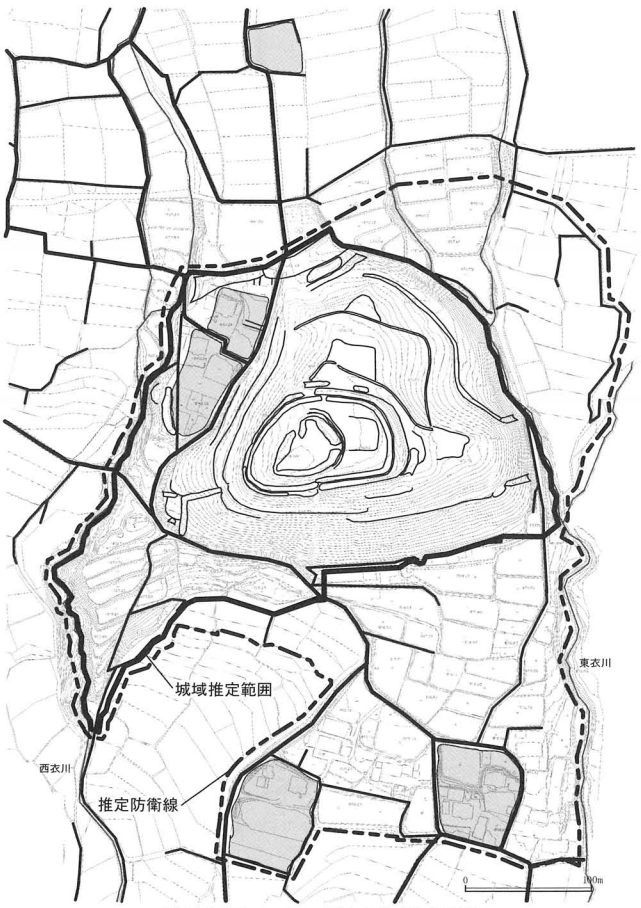
第19図－1　遺構の分布と旧公道の位置



第19図－2　推定導線



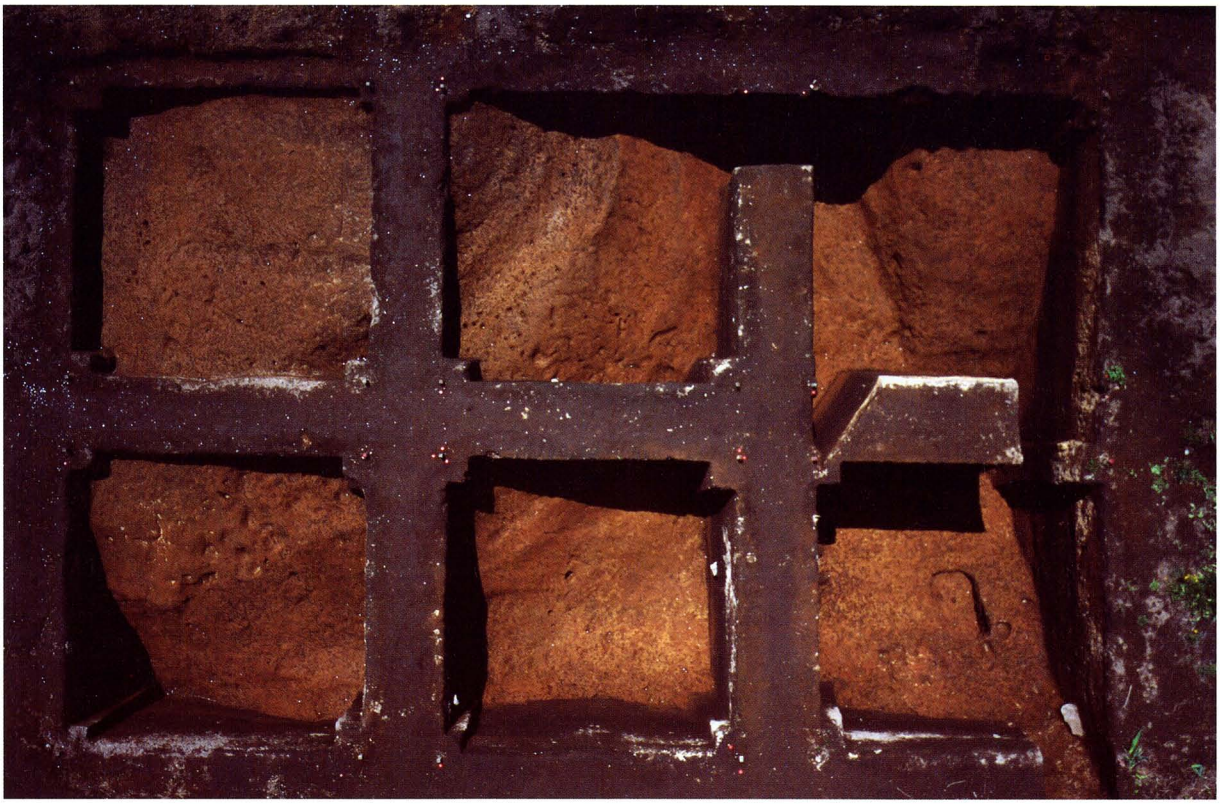
第19図－3　城域推定範囲



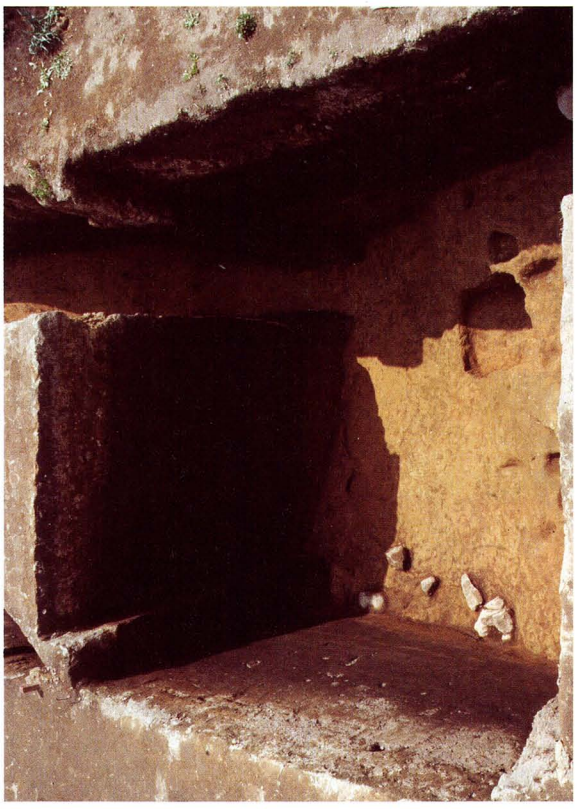
第19図－4　城域と防衛線

谷戸城全景（南上空より）

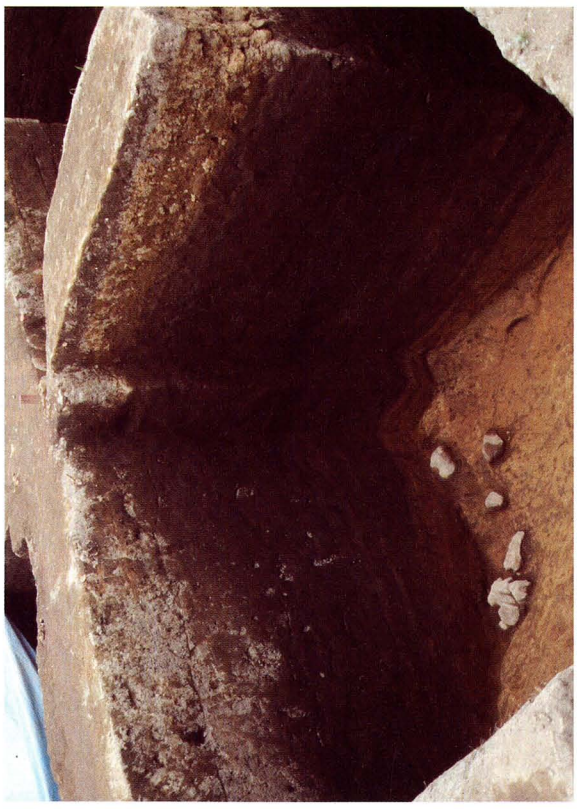
平成10年度調査地点（中央右上）



平成10年度トレンチ



平成10年度 e-2-4トレンチ(北から)



平成10年度 e-2-4トレンチ(東壁及び南壁)

平成10年年度 e-2-3トレンチ(北から)

平成10年年度 f-2-4トレンチ(東から)

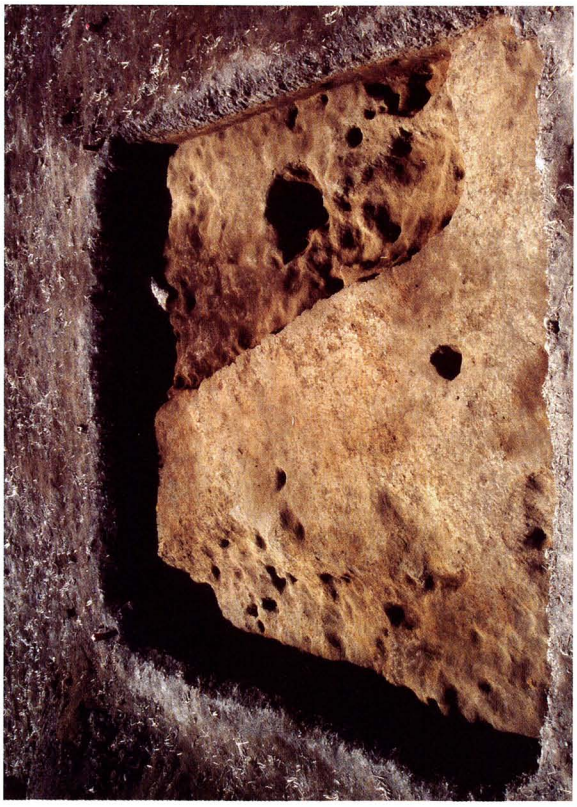
平成10年度 e-3-1トレンチ(北から)

平成10年度 e-3-2トレンチ(北から)

平成10年度 e-3-1トレンチ箱堀セクション

平成10年度 f-3-1トレンチ(南から)

平成11年度トレンチ(東から)



平成11年度 b-5-4トレンチ(東から)

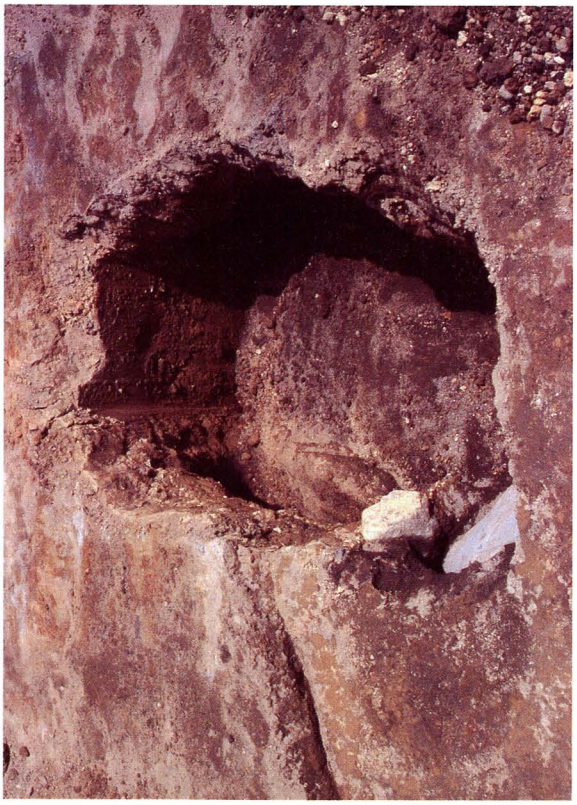
平成12年度調査地点（南から）

平成12年度トレンチ

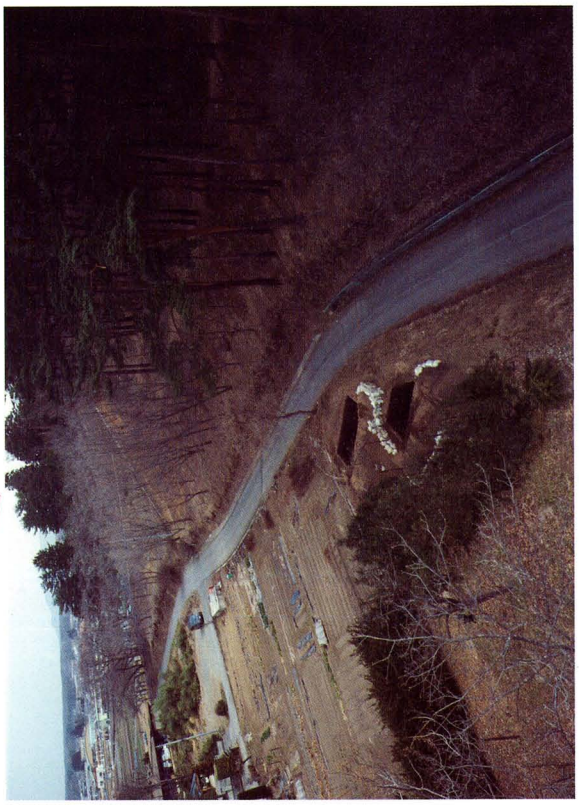
平成12年度 f-2-2トレンチ(西から)

平成12年度 f-3-2トレンチ(西から)

平成12年度 f-4-3トレンチ(南から)



地下式土坑



平成13年度調査地点（南から）

平成13年度トレンチ

平成14年度調査地点（北から）

平成15年度調査地点（北から）

平成15年度調査地点全景

報告書抄録

ふりがな	しせきやとじょうあとしゅうへんいせき
書名	史跡谷戸城跡周辺遺跡
副題	史跡谷戸城跡範囲確認調査報告書
シリーズ名	北杜市埋蔵文化財調査報告第33集
著者	佐野隆
発行機関	北杜市教育委員会
編集機関	北杜市教育委員会
所在地／電話	〒408-0115　山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1　　0551（42）1373
印刷所	株式会社少國民社
発行日	平成21年（2009）3月31日

ふりがな	やまなしけんほくとしおおいずみまちあざまちや・じょうなん
所在地	山梨県北杜市大泉町谷戸字町屋・城南
位置	北緯35° 51′ 15″　東経138° 23′ 20″　標高862m（頂上）
調査原因	史跡谷戸城跡の範囲確認調査
調査期間	平成11年3月8日～平成19年3月31日
調査機関	北杜市教育委員会生涯学習課文化財担当
調査面積	2,503㎡
時期	平安時代～中世
主な遺構	平安時代の住居跡4軒、中世山城に伴う堀跡、地下式土坑など
主な遺物	中世の青磁破片、内耳土器破片など
特記事項	史跡谷戸城跡の環境整備事業に伴い、谷戸城跡の城域を検討するために実施した確認調査。谷戸城跡の大手口などが確定された。

北杜市埋蔵文化財調査報告第33集
谷戸城周辺遺跡
史跡谷戸城跡周辺遺跡の確認調査報告書

2009年3月25日印刷
2009年3月31日発行

発行　北杜市教育委員会
山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1
TEL（0551）42-1373

印刷　株式会社少國民社
山梨県甲府市丸の内2-7-24
TEL（055）226-2125